治廿八年一月十四發行

# 女鑑

第七十八號

東京國光社

# 女鑑第七十八號目次

大江磐代子



## 新年の辭

吹く風は木々の枝をはならさぬを
　　山はひさしきこゑぞきこゆる

と詠まれたる古き言の葉、今に、ためしかはらで、四方の海は、波風の音を絶え、久方の天日のかげ、とこしへにのどかなり。あはれ、掛けまくも綾にかしこき吾が　大君の、萬代かけて知ろしめすなる此の大御代に、蒼生と生れ出でて、天よりも高く、地よりも厚き大御惠をかゝぶり、茲よ、うらゝかなる、あらたまの年を迎ふることを得たるは、そも〳〵、何の幸ぞも。されば、千早振神代の

昔より、天壌のむだ極なく、都賀の木の、彌繼々に、繼ぎ來ませる天日嗣の、御榮えまさむ事をこひのみ奉るは、吾人、蒼生の務にて、山蔭の忘草さへ、え忘れぬ事にぞあるべき。

吾人は、いかにしてか、大君の御惠に報いまつるべき。何事をしてか、大君の御恩に答へまつべき。そは、各自、學の道の種々、務の業のこと〴〵を勤み勵みて、清き、直き、赤き眞心もて、秋津島大日本國を、安國と平けく治しめす、吾が大君の、天の下、四方國、千萬國をこと向け和け、服從はぬ醜の夷國を、打ちきため給へる大御稜威の萬一をも扶翼け奉りてこそ、雨露の、深く、厚き大御惠に、報い奉るともいふべけれ。

古き諺にも、一年の計事は、年の初に、一月の計事は、月の初に、一日の計事

は、朝にせよといへることとあり。世のなりゆきは、誠に測り定めがたきことにて、飛鳥川の、淵瀬わかぬ世なれども、眞の理に、二つなき限は、おほ方は、初より、おし定めかぬる事かは。かれ、始を正しうする事は、なべての事の、行末善からむ初なり。

吾人蒼生の、各自、勤み勵みて、悉、一意に、誠の道を履みたどりて、皇御國の御光を添へまく思ふ心は、常にかはりなきも、猶も、この年の始に、その本を固めて、一年が程も、千萬歳の行末も變へじとの、眞木柱、太く雄々しき志を定めおくべき事になむ。

斯く、善き道をのみ、常に、心にかけつゝ、立ち返る年の初より、身もたなしらず勤むは、人たる道の誠にもかなへる事なりかし。

古き歌に、

よきことをますみの鏡けふ見れは
かねて千歳のかけぞうつれる

また、古き語にも、

積善の家には餘慶あり

など見えて、いとも、めでたきことの極なり。水の流、雲のゆきゝの、移變ある世にも、唯、この理のかはらぬを頼みて、諸の善事を、眞澄鏡のますく〳〵も、勉め勵みて、春野には、花をかざし、秋山には、紅葉手折りて、幾千代の數をもわかず、吾が大君の大御世を、常磐に、堅磐に、彌榮えませとこひのみ奉るべきことにこそ。いま、あら玉の年の初の壽辭述ぶるにあたり、諸孃に告げまゐる

らすること然り。

# 論説

## 女子の體操に就きて

細川潤次郎

人は、一個の動物なれば、身體の運動は、固より缺くべからず。まづ、何事をなさんにも、運動せずして、なすべきことはあらず。この故に、學校、幼稚園には、その教育、および、保育につき、相伴ふに、身體運動のことを以てせざるはなし。而して、身體運動のことたる、男女長幼の度に從ひて、その種類も、亦、一樣ならず。これを、大別していふ時は、洋語の所謂、ヂムナスチック、即、體操と稱するものあり。この體操の中には、アゴニスチックス、即、共同游

戯の演習アスレチックス、即、闘力者の體操あり。この外、また、近來の發明ありて、一々、枚擧に遑あらず。又、カリスセニック、即、美容體操と稱するものあり。或は、ヂフアルシヨンイ、即、游戯と稱するものありて、その細目、亦、頗おほし。此等は、みな、身體運動の練修なして、そのことにつきては、夫夫の著述あれば、こゝに、詳論する必要なかるべし。體操も、游戯も、その目的とする所は、大畧、二端に過ぎず。一は、精神をして、舒暢せしむるにあり。一は、身體をして、健康强壯ならしむるにあり。この二個の目的は、古來、教育家の是認するところにして、別に、異議あることなし。近日、教育家の、體操を以て、知育、德育と並稱するは、蓋、これがためなりとす。體操と、游戯とは、固より、體育における唯一の方法なりと雖、よく、これを用うる時は、その効用

は、決して、體育にとゞまらずして、又、以て、知徳を涵養すべし。體育の、知育、徳育に關すること、かくの如く、それ少からず。而して、所謂、美容體操と稱するものは、特に、女子の體操にして、女子の體力を、强壯ならしむると同時に、その擧止をして、閑雅優美ならしむるものなり。體操の原則より、これを見る時は、尋常體操も、美容體操も、異なることなしと雖、美容體操は、特に、女子の性質に適せしめたるものにして、その運動の方法、器械を用うると、用ゐざるとにかゝはらず、すべて、男子の體操の如く、劇烈ならざるを要するものなり。その器械を用うるものと雖、亦、平日の如き手足の運用に外ならず。游戯と稱するものと、相去ること、幾何もなし。故に、游戯の中の、やゝ、活潑なる種類のものを用うる時は、これと、相似たる運動をなすことを得べしと雖、一般

の游戯にありては、或は、一方に偏倚して、かへりて、身體發育の害をなすことなきにあらず。美容體操にいたりては、夫々の規矩ありて、幾様の變化をなし、以て、全身の筋力を、均一に發育せしむることを得べし。これ、美容體操の、游戯の外に缺くべからざる所以なり。

然るに、我が國にありては、一般の、體操を用うること、猶淺く、經驗も、亦少し。殊に、女子體操にありては、頗、異議あることを聞けり。異議者の説に據れば、活潑の運動は、女子の性質に適せず。あはせて、女子天然の美觀を損せんことを恐るゝものゝ如し。果して然る時は、決して、採用すべきものにあらざるが如しと雖、これ、恐らくは、皮相の見にして、眞正に、美容體操の趣味を解せざるものならん。予は、主として、美容體操の方法を斟酌し、力めて、異議者

の說を納れて、その顧慮する所の弊害を避け、その游戯におけるも、亦、力めて、規律あるものを擇み、危險の虞なく、惡風に染まざらんことを期するものなり。顧ふに、近來、日清の事おこり、陸海の軍人は、粉骨碎身して、以て、國威を、海外に耀かせり。然れども、前途、猶、とほくして、安を偸み、逸に耽るべき時にあらず。將來、强國の名を得るにおよびては、宇內の强國と伍せざることを得ず。たゞに、戰鬪のことのみにあらず。農、工、商、百般のこと、みな、我と競爭する强敵あらざるはなし。この强敵に對する資本は、我々の身體なり。體育は、つねに、必要なるも、今日以後は、閉鎖したる時代より、更に、必要なりとす。但、このことは、主として、男子の爲にいふべきものなれども、間接には、女子の爲にも、警戒を加へざるを得ず。何となれば、女子は、人類の母なればな

り。母たるもの、強健ならずば、おほく、強健の子を得ること能はざるべければなり。

# 徳川時代女子教育史評論（十一）　岡崎遠光

## 同時代女子教育の要概（をはり）

『商人は、賣先、買先は、父母の如し』とは、享保元年の開板ゝかゝれる『女手習教訓之書』のいふ所なり。此の如き教へ方が、如何なる結果を、招きしかと尋ねるゝ、小川顯道が、其の後、大凡一百年を經て、文化の頃、上下の分限の亂雜なるを、嘆じたる文に曰く、『諸商人が、卑賤の者へも、品物を賣りつけんとて、崇め敬ふより、身分賤しき町人共の妻女をも、お孃樣御新造樣と唱ふるや

うなれり。是等は、昔は、武士以上のものゝいふ詞にて、町人の僭上無禮なる事、惡むべし』といふ有樣になれりけり。教訓書の著者は、固より、上下の分限を亂雜にしても、賣先、買先を大切にせよ、との意にて、かくはいひしにあらざるべし。然るに、かくなりしは、商家、射利的眼光の、單に、金錢をのみ見張りて、大黑、惠比壽を崇拜する、拜金宗旨の致す所なり。今日にては、上下の分劃、昔の如からざれば、商人が、花客を大切にもてなして、非人、乞食にても、花客となれば、如何にも、鄭重に、物言ふも、咎むる人なからん。さればとて、唯利主義は、予は、大不贊成なり。こゝに、先、吾が志を獲たるは、天保二年の刊行にかゝる、手島堵庵の著述『女前訓躾種』の言なり。曰く、『商賈は、算勘を心に委ね、高利をむさぼらず。量入せず。升目正直にして、人の目を掠めず。滞な

く交易し。買込、占賣せず。虛なる商をせず。己を約にして、下使を惠みなば、商人の道といふべし」と。商家の妻女の心懸は、まさに、此の言の如くなるべし。尙、女は、其の性、男に比べて、儉約の度を知らず、理否の決を誤る事も多くあれば、常に、金錢堆中に居りても、決して、その爲に、愚痴の心を起すことなく、國の爲、家の爲、子孫の爲には、父、母、夫、兄等にすゝめても、能く散らさん、と心がくべし。

又、こゝに、算勘を心に委ねし事につきて、面白き話あり。これは、元和元年出版の一書に見ゆ。或質商の娘、嫁入せしに、夫婦の中のいと〳〵睦じきは、兩親も、殊の外、喜びたれど、此の娘、質屋に育ちて、珠算九々の聲を覺えければ、かりそめの事にも、必、九々の詞を遣ふには、兩親始め、夫さへ困じけり。甚し

きは、珍しき客人の前までも、はゞからで、二二天作までものいふを、長上は、度々、戒めけれど、つひに止まざれば、その事、生みの親に話して、離縁せしとぞ。然るに、此の女、稚き頃より、數學の敎に、身を入れたりければ、その去る時に臨みて、三四十二で、嫁入し、四四十六で、子を設け、四五二十にて去らる、よといひて、

四々ならば十六つれて行くべきを
九々になるゝか獨走るは

といひきとかや。かゝる女は、二千五百年來、はじめての奇婦人にて、眞實とは、聞え難き事にはあれど、其の生家る躾方、即、敎育の如何は、嫁入して後、かゝる凶事を招くものとの、一例となるべし。

さて、數學は、商家の妻女に、至要なり、讀書は、左程達者ならずとも、よろしといふが、德川時代敎育家の通則にてありしにも拘らず、學才ある女は、多く商家より出でたりき。即、俳家の泰斗、加賀の千代女は、加賀松任驛表具商の娘なり。又、十七文字にて、名の、今に聞ゆる秋色は、江戸小網町菓子商の娘なり。歌と文とに達者なりし倭文子は、江戸京橋弓町　商人伊勢屋の娘なり。千蔭の門人いなぎは、歌と、書とに巧なりき、との名ある女なるが、これは、至りて、賤しき商家の妻なり。京傳の妹にて、狂歌に堪能なりし黑鳶式部、及、其の姉某も、商家の妻女なり。かつて、「女鑑」に見えし百合子も、玉蘭も、一商家に育ちし女なりけり。その源因は、次回より、本論を述べんとすれば、其の折に論はんとす。

# 漢文學科につき女生の惑を解く　三輪田眞佐子

つゞいて、處世論を揭げんと欲しも、今日は、女子教育上、一言せざるべからざるものあり。そは、漢文學科に對する、數多の女生が惑なり。元來、教育上の病根は、學生の惑より生ずるものにて。殊に、女子は、理心乏しくて、感情深ければ、日清事起りし以來、惑へること甚し、故に、漢文學科は、果して、如何なるものなるかを知らしむるは、無益にあらじ。

蓋、諸孃は、漢文てふものは、我が仇敵なる、清國の學にはあらざるか。さかれは、焉、彼等の糟糠を嘗めんやと。抑、敵愾心の強きは、最、好すべきものなりとも、かゝる感情は、全、我が國民の學びつゝある漢文學につき、いまだ、一定の見識を定めざるより、起るものならんかし。以下、其の惑を解かん。先、目下、

孔孟をしてあらしめんか、必、われに與みし、反りて、彼れ清人は、悉、孔孟の罪人たる所以を論ぜん。元來、今の清國の先祖は、三代の世には、肅愼と云ひ、その後、挹婁、あるは、勿吉と云ひしが、隋唐の頃に至り、靺鞨と稱したりき。亦、その後、契丹に屬し、女眞と稱しき。宋の中世に至り、女眞は契丹に背き、國を金と號しき。その後、蒙古に亡されしが、明の代に、その殘族の、今の盛京省の邊にあるもの、自、建夷と號し、遂に、滿州を建て、一朝、明を亡し、今の清國をなせしものなり。されば、今の清國は、往時の、夷狄なること明なり。況して、支那には、古より、山戎の後なる烏桓、及、鮮卑等、犯して帝王となり、葷鬻の後なる、匈奴、及、突厥等、入りて帝王となるあり。その他、氐羌、あるは、苗民さへも、中國に入り、王と稱せしことあれば、實際、前趙、前秦等を始

め、元、清に至るまで、夷狄、戎蠻にて、帝王の位を僭せしもの、殆、三十回に及びぬ。焉、儒教を繼守し得ん。宜なり。深く、儒教の、彼の國に行はれざるは、されば、人種の點より言ふも、舊敵の元、今敵の明は、孔孟より、擯斥されし人種なり。換言すれば、孔孟墳墓の地を、蹂躙し、眞の支那人を追ひし、野蠻人に外ならず。

凡、智識を開創する人は、固より、尊しと雖、既に、發見されしものを、參考に利用するも、亦、卓見の人にぞある、我が國へ、儒教の傳はりしは、その淵原、遠し。現に、眞備は、漢字に基き、片假名さへ作りき、と言ふものあり。されば、思想の混入も、勿論なり。おもふに、我が國は、この豐芦原に、國を開き給ひし神代より、君臣の分、父子の道等、總て、人道は、固有に存するを以て、

敢て、他所より、教を導くに及ばざりしも、儒教は、吾が民智人徳の、材料となるも、秋毫も、國情に逆る處なければ、直に、之を採用せしものなりけん。佛教の如きは、傳來の當時、斯の如し。決して、儒教と、同日の論にあらず。而して、歳月と共に、我が國人は、儒教を、日本固有の道に同化せり。これなん、我が國民の、卓見に由るなる。古歌に、(あきしまの大和錦に織りてこそ唐紅の色ははえけれ)とあり。唯、儒教にまれ、英、佛、獨の學理にまれ、總て、外國の教育、及、文學等を學ぶもの、之を、日本固有の道、及、文學に同化する覺悟こそ、肝要なれ。苟、同化せんか、日本は、消化力の強き國なりとの、名譽こそ得れ。いかで、耻づべきものかは。例之、牛は草を食うて、肉を作るも、誰か、草は肉なりと論斷し得ん。おのれ聞く。耶蘇は、小亞細亞にて生れしと雖も、實際、歐米

諸國に行はるゝを以て、恰、我が亞細亞のものにあらずとなせり。之と等しく、儒教の、眞に、行はるゝ點より見れば、儒教は、我が國の教と云ふも可なり。一歩進みて、儒教の主義を説かん。おもふに、孔子の時は、春秋戰國のときに際し、世は、權謀術數の世となりて、如何ともすること能はざりし故に、孔子は之を憂ひて、仁義を説き、孝弟を諭し、之を、實踐躬行せしめんとしき。されば、儒教は、支那人固有の習慣を集めしものならで、聖人の理想に基く故に、反りて、戰國時代の民心に、適せざりしなるべし。さればにや、孔子の生涯は、あるは、桓魋に殺されんとし、あるは、陳蔡の際に圍まれしなど、千辛萬苦せしも、遂に、天下用うるものなくて、全、不如意のみなりき。故に、止むを得ず、自、詩書禮樂を修むるに至りき。されば、孔子の道は、有道の國に適し、不法の

は、皆、讀者の知る處なり。是、不正不義の淸國は、孔孟の徒にあらざるや、明なり。

孔子は、徒に、戰國の民を治めんとて、方便的の敎を定めしものと、なおもひぞ。抑、孔子の敎は、天地萬有に通ずる、自然の大則に基きしを以て、君臣、父子、夫婦等の道も、偶然の感情を基とせしものにあらず。故に、天地變せさる限は、何れの世、何れの國の人々にも應用せんも、誤らず。おのれ聞く、歐米諸國には、各、希臘の古學をなすと。是、昔、希臘には、詭辯など大に流行して、正道正に廢れんとするとき、(ソクラテス)の徒、混々と正義を解きしこと、恰、孔子に異ならざるを以て、今日、之の古文を學ぶは、その餘薫を味ふためとか

や。今日、我が普通教育より、漢學を學ぶものは、決して、支那現今の制度、及、人情を學ぶにあらず。遠く、古學の思想を見ん爲ならむ。殊に、天地の大道よ基き、人倫を說きし如きは、歐米近世哲學さへ、三舍を避くるばかりなり。或は、孔孟の學を非難するものは、固、支那は、堯舜より、既に、共和主義を尊へりと。されど、漢學の要は、他の思想にありて、決して、政體にあらず。孔子曰く。其の界に入れば、國禁を問へと。實に、政體上の事は、他國に移すべきものにあらず。唯、之を取捨するは、敎師の責任なり。

要するに、人、各、その學ぶ所に癖し易きものなれば、漢學を學ぶのみならず。英、佛、獨の學を學ぶ人も、大に心すべきなり。あはれ、學派の爲、日本を忘るるものは、眞の學者にあらず。されど、感情のみに左右されて、一定の判制心な

きものは、小人たるを免れず。唯、日本人の心を、失はざるを良とす、亦、諸孃の、近來學ぶ和書の文には、佛敎の趣意を含む十訓抄、方丈記、及、徒然草の類、頗、多し。若、和文なりと心に許し、讀書のまに〳〵、眞の禪理はとまれかくまれ、徒に、厭世的の感慨を作り、現在を輕ずるゝ至らば、あはれ、邦家の大害を釀すに至らむ。本來、女子は、國民の母なれは、早晩、婦人の思想は、國民の思想に感染せん。かく、おのれの喋々する所以のものは、必しも、漢文に限らず、一般讀書の心得なり。請らくは、諸孃、茲ゝ、年は改り、學期は更りぬ。今、亦、氷然惑を溶き、旭さす、學の窓に向へかし。されば、東風吹き送る梅花の香は、一きはゐめやかならん。

# 史談

## 大江磐代子

大町芳衛

かけまくも、かしこき、今のみかどの御曾祖父にわたらせ給ふみかどを、光格天皇と申しけり。御さが、いと、さとくましまして、物ならひのわざを好み、歌をよくせさせ給ひて、御位におはしゝほど、すたれたる禮をおこし、古の典にかへさせ給ふなど、御德、世にすぐれ、よく、人をしろしめして、近き世の聖の帝と仰がれ給ふ。げに、こよなく尊きみかどなりけり。

この帝の前のみかど、後桃園天皇とぞ申しける、安永八年といふ年の長月、かりそめの御疾病にかゝらせ給ひけるに、わしくなりまさりて、神無月の二十九日といふ日に、かむさり給ひき。その重くならせ給ひしほど、御年、いと若くて、日嗣の皇子、いまだおはさゞりしかば、後櫻町上皇、准后内前公と謀りたまひて、邦頼親王を立てむとおぼせど、尚實公のうけがはざらむことを慮りて、帝のいたつきの床を訪はせ給ふに、尚實公、近く御側にはべりて、おぼし給へる事ども、わかし難ければ、内前公して、御殿の外に呼び出させ給へども、みかどの御疾病の、かく

危かるを見棄てまつりて、何方へかまかるべきとて、動かざりしほどに、みかどは、尙實公をかへりみて、いましの心のまゝに、ふさはしき人をえらびて、天津日嗣をつがしめよと、のり給ひて、やがて、雲がくれせさせ給ひにけり。邦賴親王は、一たび佛門に歸依せさせ給ひけれどにや、尙實公はならびまつらず、數多かる竹の御園生の中に、ひときは、めでたき一ふしを選りいでゝ、天つ御位におしたてまつりぬ。やがて、光格天皇の御事なり。

かく、御心あきらかにましまして、日嗣の皇子にえらまれ給ひしにつけても、この御そのふの若竹をおはしたて給ひし根ざしの御親の御上こそ、とりわきて、ゆかしく思ひまつるなれ。つゝしみて、皇代紀事、近世帝王系圖、親王系圖などいふ書を見るに、御父は典仁親王と申しけり。御母なむ、成子内親王なりける。こゝに、皇胤紹運錄によりて、御系圖を尋ねまつるに、

東山院
- 中御門院 ― 成子内親王
- 直仁親王 ― 典仁親王
  - 光格天皇

大かたの御國の史には、成子內親王を、このみかどの生の御親としるしまつれり。されど、野史といふ史の典仁親王の條に、「典仁配成子內親王無子」とあれど、生の御親は、別にその人あらむと、疑がはれけれど、いかなる御方ともわかざりしに、明治十年にいたりて、西尾爲忠といふ人の上奏によりて、始めて、このみかどの生の御親の名ぞ、世にあらはれたる。そは、雲の上の種にあらず、竹の園生の根さしにもあらず、伯耆の國の藩士、岩室宗賢といふ人の庭の撫子、色も香もふかき磐代子と呼ばるゝ御方なりけり。

岩室氏の本姓は、大江と云ひけるを、その遠つ祖、伊賀守重利といふ人、濃州岩室の城主なりしかば、岩室をぞ氏といひける。この人は、織田信長につかへ、其子重義は、播州の別所長治に事へけり。重義の子、義休にいたりては、池田家につかへて、倉吉といふ處にうつれり。のち、幾代を經て、宗賢といふ人ありけり。始、市郎右衛門と云ひけるが、よしありて、浪人となりて、京に上り、醫師となりて、名をば宗賢と改めたり。倉吉をいでたちし時、その妻なる林子、はらみて、あゆみがたければ、とゞめ置きて、ひとりいでゆきけり。かくて、延享元年といふ年、林子、やす

らかに、女の子を生みて、鶴子と名づけぬ。後に磐代子と申すは、この幼女の事なりけり。

九歳までは、その母君と共に、倉吉に住み給ひしを、その年、父君、都より下りて、磐代子をゐて、都に上りぬ。宗賢の年頃親しめる人に、生駒とて、禁裏の御使番をつとむるものあり。その妻を壽仙といひて、才、いとめでたく、禮儀・作法にもくらからぬ女なりけるが、磐代子のしとやかなるを、かなしがりて、我子の如くにいつくしみ、書よむわざ、手習のわざをはじめ、なにくれとなく敎へけるに、うまれつき、さとければ、一を聞て、十を知り、學のわざ、いやすゝみにすゝみて、未頼母しき才女とはなり給ひにけり。

年たけ給ふほどに、召し出されて、典仁親王の御息所、成子内親王の御側に事へ給ひぬ。その姿は、うるはしとにはあらねど、けだかくて、はちすの花の露を帶びたるさまもたゞならず、たちゐ、ふるまひ、度にかなひて、いやしからず、歌をよくし、手蹟もめでたく、女子の道、一も欠くる所なかりしかど、御息所、またなきものとめでさせ給ひ、親王もまた、その才德をめでさせ給ふあまり、御息所のすゝめ

給ふまに〳〵、侍妾とせさせ給ふほどに、いよ〳〵、身をつくして、親王にかしづき、心をこめて御息所をうやまひて、御妹脊の中さへ、いとむつましかりければ、おしなべて、ほめそやさゝるものは、なかりけり。この時より、磐代子と改めたまひきとぞ聞えし。

明和八年五月十一日といふ日に、御息所は、御病にかゝりて、はかなくならせ給ふ。なげきの中にも、月みちて、やがて、磐代子は、親王の御子を生て、祐宮と名付け給ひぬ。この宮なむ、後に、光格天皇と申しける。

かゝれど、尚實公のはからひにやわりけむ、光格天皇をば、成子内親王の御子とのみふれしらせて、まことは、八月十五日にあれましたれど、かくては、御息所の世を去り給ひしのちなれば、改めて、三月十五日にあれませりなど、いひしらせければ、世の人、つひに、磐代子の事を知るものなきに至れり。されど、みかどには、生の御親の御上を忘れさせ給はず。聖護院宮の御舊記の天明四年正月十六日のくだりに、「磐代、 光格天皇の御生母たるを以て、天皇より、御内密に、御扶助金等下し賜はる」とあるを見ても、如何に、このみかどが、御親の上に、御心やらせ給ひ

しやを、おしはかりまつるを得べきなり。
かく、磐代子の御事は、世にあらはれざりしを、明治十年に、西尾氏建言せしほどに、徳大寺宮内卿も、この事に同意を表されて、書を添へて、たてまつりけれど、つひに、明治十一年三月六日、特旨もて、正四位をおくらせ給ひ、光格天皇の生の御親たることを、御國の史にあみいれよと、修史館に仰せ下させ給ひぬ。こゝにいたりて、光格天皇の生の御親は、磐代子におはすこと、また、疑ふべくもあらず。これも、ひとへに、あきらけき世のみめぐみなりとぞ、人々申しあへりける。
磐代子、のちに、また、一人の御子を生みたまへり。この王子なむ、聖護院盈仁親王と申しける。かくて、天明七年十二月廿九日といふ日に、父君宗賢、聖護院に召し出されて、法橋の職を拜命して、此上なき面目を施しけるは、ひとへに、磐代子のゆかりあればなり。あはれ、世に、これに過ぎたる孝の道のをはりやはあるべき。
寛政六年といふ年の七月、典仁親王、はかなくならせ給ひき。その悲しみに、堪へで、磐代子は、みかみ、おろさせ給ひきとぞ。かくて、齢高くならせ給ふほどに、聖護院の宮には、院のかたはらに、別邸をしつらひて、磐代子を迎へて、孝養をつく

させたまひけるに、つひに、文化九年十二月九日、かへらぬみちに就かせ給ふ。御墓、廬山寺にあり。御年六十九とぞ聞えし。

磐代子は、孝行いとめでたき御方なりけり。其生母、世にありしほどは、たゆることなく、書送らせ給ひきといへり。ある時、ふみに添へて、母親の御心をなぐさめ給へる歌どもの中に、

　にごる世にうまれ逢ふとも心からこゝろの水はきよくすまむや
　散るとてもなにかいとはむ嵐にはおい木わか木の花ものこらじ

げに、心も、言葉も、いとめでたしや。父親、はじめの程は、心あらく、怒り易くて、たび／＼、妻を迎へて、たび／＼妻を出しけり。その繼母、みな去るにのぞみて、夫の氣にかなはで、みすてらるゝことは、いとはねど、たゞ、御身に別るゝに忍びずとて、なく／＼、袂を別ちけるとぞ。これをもて見るも、いかに、繼母にかしづきつかへて、その心にかなひ給ひしやを、知りまつるに足らむ。さればにや、光格天皇も、いと孝心ふかくましまして、御位につかせ給ひたるのち、御父、典仁親王に、太上天皇の號を上らむとしたまひたるに、その時、後櫻町上皇おはせばと

て、關東にて、うけがひまつらざりしかた、みかども、御力なくて、やみ給ひにきとかや。かゝる孝心は、またく、御母親の氣をうけたまへるによれり。あはれ、この御親ありて、このみかどありきとや申さまし。

## 和田胤長の妻

福舍甚千代

庭前の梧桐風に翻り、萩の下葉も、色付き初めぬ。げに、秋きぬと、目にはさやかに見別かねども、朝夕吹き來る風は、身に浸むまで、涼しうなりまさりて、燈火親しむべき時とはなりにけり。この夜頃、徒然なるまゝに、獨、文机に向ひ居て、古の文ども繙き、反古などかき探る折しも、ふと見出でたるは、和田胤長の妻の事蹟なり。其の志の貞烈にて、其の行の非凡なるは、巾幗に、多く、類を見ず。誠に千歳の下、嘖々として、稱すべきものあり。

抑、古より、貞操清淑の行ありて、人の龜鑑ともなりにし者の、史乘にも傳らず、口碑にも殘らずして、あたら、事蹟の湮滅せるもの少からず。此の胤長の妻の如き

も、又、其の類なる可し。

今こそは、大御代の御惠にうるほひたれ。昔は蝦夷といひて、其の名さへ、よに恐き、陸奧の國岩瀨郡稻村といへる片山里に、鏡沼といふ一の小池あり。又、其の傍に、さしも廣からぬ、化粧原と唱ふる野原あり。この間に、一の石碑立てり。苔蒸し、草に覆れて、文字も定かに、見えざれども、何となう、よしありげなるわたりのさまなり。これなむ、胤長夫婦の蹟にて、千載の後までも、芳魂を止めたる所なりける。

この胤長といへる人は、義長の子にて、和田義盛の一族なりき。折しも、鎌倉の幕府にては、陪臣北條時政、勢を得て、政を專にし、忠良なる人を退け、ことごとく、源氏の功臣を失はしめむとしたり。胤長は、忠勇剛直の人なりけれど、いかで北條氏を滅ぼし、人々の危難を救ひ、源氏將軍の位を固くせむとて、泉親衡、同族義直、義重等と謀りて、密に、兵を起しつ。かくて、この事、早くも顯れしかば、北條氏は、直に、雲霞の如き大軍をさし向けたり。あはれ、胤長等がこの義軍、この忠戰、いかでか、うち勝たざるべき。されども、人多き時は、天に勝つといへる諺

の如くなりしぞ、口惜しき事の限なる。さしもの大兵に攻めよせられて、瞬くひまに打ち敗られ、親衡は戰死したり。殘りしもの共は、皆、それ〴〵に罪せられ、胤長は首謀者なりとて、陸奥國岩瀬郡に謫せられぬ。時に、建暦三年といふ年の三月十七日なりき。其の後、義盛も事を起しゝが、成らずして、敗死するに及び、胤長は、實朝の命なりとて、つひに、殺されけり。

妻は、かくとも露知らず、胤長の出陣せしより、獨り、空しき閨を守りて、貞操正しく、朝夕、夫の上のみ思ひつゞけて、やすき心もなかりけり。今日は、言傳やあらむ。明日は、便やあらむと、それをのみひた待ちに待ちたる甲斐もなく、此の度の戰に、和田の一族は、脆くもうち負けて、夫は、遠く、陸奥の國へ流され給ひぬと、聞きける折の悲しさは、げに、いかばかりなりけむ。いで、この上は、夫のありか尋ね出で、御側に仕へ奉らむ。たとひ、天を翔り、地を潜りてなりとも、今一度、恙なき御顏を見まつらでやはと、只、一筋に思ひ定めし眞心は、千曳のいはほも徹しつ可し。かくて、年月久しく住み慣れし故郷を、後に見て、知らぬ旅路にさまよひ出づる事とはなりぬ。目指す處はいづこ、聞きも及ばぬ北のはて、尋ぬる人はいか

に生死の程も知らぬなり。從者も召し連れず、只、獨、門出して往く程に、日數重なりて、故郷遠くなりまさりぬ。おぼつかなさ、心細さは、いかにありけむ。思ひやるだに哀なり。女の足のか弱くて、いとゞ道も捗取らぬに、鎌倉より警護の武士、所所に見廻り居て、たやすく通るべうもあらざりけれど、是より、晝は寢ね、夜のみ行きて、人目の關を憚りありくなど、辛苦艱難つぶさに至らざることなかりき。時しも、夏の央なりければ、暑さへ堪へがたく、又、折々は、夕立の雨さへ降り出でて、衣もしとゞにぬれそぼちぬるも、夫の身の上に比べなば、箇程のことは、物の數かはと、矢竹心を振り起しつゝ、野越え、山越え、月日經て、辛くも、兼て聞き居し、陸奥の國岩瀨郡にぞ着きにける。この時のうれしさは、又、いかばかりなりけむ。戀しき夫に、絕えて久しき對面は、早、二日三日の後とはなりぬ。いかに悴れ居給ふらむ。初には、何をか語り出でむなど、心勇み立ちて、ひたすら、逢瀨をのみ待ちこがれつ。やがて、ある草原に、荷をおろし、いと古びたる鏡を取り出でゝ、つくづく、おのが面影をうつし見れば、髮はおどろに振り亂れ、顏の艶さへ、あせはてゝ、只、黑み瘦せたるさま、元のにはひは、つゆあらざりけり。こはあさまし

の我がさまや。かくて、夫に見えむも、余に心づきなしとて、髪揚げ、身なりをつくろひなぞしたり。されバにや、今に、その所を、化粧原となむ唱ふるとぞ。かくて、夫の行方を、所の人に尋ねしに、こはいかに、此の處に溺され給ひし後、間もなく罪なはれ給ひきと云ふ。悔し悲しなどは、言はむも中々なりけり。始は聞きて疑ひぬ。再聞きては驚きぬ。三たび四たびに、誠の事と知りつる時は、張りつめし敏心も、とみに弱りて、現にもあらざりけり。思へバ、出陣の時に別れしは、此の世に相見る名殘なりしか。野に伏し、山に宿りし、いくそバくの苦も、皆、夫に逢はむ爲とてなり。今は、望の綱も切れはてぬ。生きてかひなきこの玉の緒、後の世の御供仕へ奉らむ。さなり、さなりと、うちうなづきて、又もや、例の鏡を取り出でつ。さるにても、この鏡よ。妾が夫にとづきまゐらし丶時、母上の御詞には、夫に仕へて、操を守り、かりそめにも、後めだき事はすな。この鏡の曇なきを、おのが心とし、いさゝかも、見にくき影を寫さぬやう、常に、心がけよと、數々、敎へ給はりき。又、古き聖人の誡にも、貞女は、兩夫に見ゑずと聞けり。この鏡は、再、我が姿をうつさむ用なしとて、あたりの小池に投げ入れ、其の身も、やがて、入水し

てぞ、みまかりぬる。この故事によりて、今に、其の池を、鏡沼といふとぞ。
あはれ、この胤長の妻よ。誰人の娘にかありけむ。又、其の名は、何とかいひたりけむ。傳はらざれば、知るによしなし。されど、其の貞烈の事蹟は、天地と共に殘りて、長に朽つることあらざるべし。世に、貞操淸淑の聞ありし女は、いと多かれども、この胤長の妻の如きは、蓋、其の最なるものならむ。おのれ、つら〳〵、今の世の女の樣を見るに、轉、かなしみに堪へざることあり。この明治の大御代となりて、泰西の文物入り來りしより、西洋としいへば、その事のよしあしを撰ばず。悉、これに習ひ、我が國固有の美風をも、うち破るに至れり。やゝもすれば、未、さるべき學校をも卒業せずして、妄に、男女同權などいふ僻說を稱へ、我が夫に、おのが靴の緖を結ばしむる嗚呼の痴者もありとか。世の令嬢たち、この傳をよみて、いかに感じ給ふらむ。
燈火揭げつゝ、このふみ書き終ふれば、夜は、いたく更け渡りて、千草にすだく蟲の聲々、いとゞ、あはれを催しがほなるも、心ありげなりや。

# 節婦りまの傳

龍野芳子

よの中に、花てふ花は多けれど、雪霜のくるしみをしのぎて、色香めでたくさきいでし梅の花にしくものなからん。和田りまとなんいへる女、貞操たかきこそ、げに、此の花によそへて恥ぢざらめ。りまは、島根縣安濃郡鳥井村のものにて、わかきとき、和田吉郎兵衛と云へるもの丶妻となり、枝をつらね、つばさをかさねんとの契こまやかに、一人の女の子さへ設けて、貧しながらも、朝夕へだてなく暮しけるが、花にあらしのためしの如く、或日、吉郎兵衛は、近きわたりの山に、松の枝こりに赴きしに、如何したりけん。目もはんばかりの高きより落ちて、いたく傷せしかど、長の年月の間、治療怠なかりしかども、なか〳〵、癒ゆべうも見えざりけり。りまの歎一方ならず。あらんかぎり、力をつくすとも、其の甲斐なくて、世をよそにし給ひなば、頼なき世にながらへて、あらぬうきめをかさねんより、手に手をとりて、蓮の上の契かはさんなど、行先の事までも、何くれとなく云ひかはして、ひた泣になきけれど、かくては叶はじとて、薬のしろを求むるかたはらに、夫の好むところは、何不足ことなく調へて、一しは、介抱に怠らざりしかば、神もあ

はれとおぼしけん。夫の病、遂に癒えたりき。されど、かたはものとなりて、立居だに叶はざるものとなりければ、なみ〳〵のものなれど、いまはしき事に思へれど、りまは、なか〳〵に、雪をしのぎて咲きいでし梅の花の如く、香、ます〳〵ゆかしく、みさをます〳〵、かたく、立居ま丶あらざる夫にかしづき、大小便の事までも、ねもごろにとりあつかひ、夫の望むことにしあれば、あらなみさわぐ海原にもともなひ、猿とびかふみ山の奥にもせおひ、ひたすら、夫の心をなぐさめんとのみつとめたりき。其の上、生計の道に追はれけれど、夏のあつさと、冬のさむさとにか丶はらず、少しばかりの土地を耕し、其の暇には、うみつむぎの業に餘念なく、夫には、檜杓などをつくらせて、そをうりありき、よのつねならぬ辛苦をなめつくして、家のうち、むつましくくらしてけり。されば、其の事の、官まで聞えたりけん。いたくめで給ひて、いくそばくのたまものさへ、下し給はりけり。あはれ、のどかなる春風のふきわたる園生に、咲きみだれたるくさ〳〵の見ばえのうるはしき花よ。此の花にくらべて、恥づることなからむや。

# 學園

## 進講筆記

萬葉集卷第八

太上天皇御製　一首

波太須珠寸、尾花逆葺、黑木用、造有室者、迄萬代、

こゝに、太上天皇とござりまするは、日本根子高瑞浮足姫の天皇、元正天皇と諡し奉つた女帝であらせられまして、御幼名を、氷高の皇女、またの御名を、新家の皇女とも申上げました。草壁の皇子の皇女にして、天武天皇の御孫樣に當りまして、文武天皇の御姉樣になります。また、内親王であらせられました時より、早く、御賢德が、世に顯れまして、天然、御度量廣く、御仁惠深く、御心うち靜まりて、優美にいらせられ、仰せらるゝ言は、皆、禮に適ひ、御婦德に於いて、缺目無き御方であらせられました、故に、朝野、其の德に服し奉りまして、御在位の間の御仁政、御美德は、短き時間には、述べ盡くし難きほどの目出たき大御代でござりました。

此の御製は、此の次の　聖武天皇の御製の左注に、左大臣長屋王の佐保の宅にて、肆宴し給ひし時、　詠坐せる御歌なりとござりまするが、いかにも、御製の様、左様に窺はれます。

波太須珠寸は、薄の、穂に出で丶、旗のやうに見ゆるより、云ひ馴れた詞と見えます。尾花も、薄の、穂に出でたる名でござりまして、畢竟、同じ物でござります。かやうに、同じ事を、疊み懸けて云ふは、古言の常でござりまして、千五百秋の長五百秋、又は、拆釧五十鈴など云ひ續くると同様にて、如斯、重ね懸けますると、語の勢を生じて、音調が、強く鋭く聞えます。逆葺は、薄の穂を、下に向けて葺きまする故に、逆さま葺と云ふ意味でござります。黒木は、皮の着いた儘で、削らぬ木を申します。

さて、御製の大意は、此の奈良山の黒木、即、皮着の木を以て、尾花を、逆葺に葺き、清淨に造搆へたる此の室は、萬代迄も、朽ち損ずること無く、又、いつ迄も、今日の如く、臨幸ありて、肆宴し給はんと、此の室を褒め祝ひたまひし、いとめでたき御製でござります。

然るに、此の室は、尾花葺、黒木造の、極めて質樸麁糙なる搆造でござりまして、何程能く保ちましても、十五年か、乃至二十年の中には、必、修覆を加へねばなりませぬ。中々、此度、御造營あらせられし千代田の宮城の堅牢壯麗なると、年を同じうして語らるゝことではござりませぬが、此の粗造なる家作を、万代ずでと、御言葉わそなした御主意を、心を注めて窺ひ奉るに、是には、必、深き御主意の籠つてあることゝ存じます。此の天皇の御即位の年を、今年明治二十二年より數へますると、千百七十五年の昔に當りまして、隨分、久しい事でござりまするが、此のずつと前方より、外國の交通も始まり、佛法なども渡つて參りまして、此の頃、宮殿、寺院等の建築も、隨分、盛大に赴き居りまして、此の天皇の御跡を繼がせられました聖武天皇の御時代には、五位以上の官人、又、庶人の、營辨の力に耐ふる者には、瓦葺、朱堊の家を作れよとの御沙汰も下りました程のことでござりまして、殊に、此の長屋王は、高市の皇子の長子でござりまして、位、正二位、官、左大臣に進み、天皇、其の第に臨幸あらせらるゝ程の身柄でござりますれど、富み榮えて居りましたことは、無論でござりまして、其の邸宅も、隨分、

宏壯で在つたかとおもはれます。されバ、黒木造は、全く、臨幸の爲に、新に建てましたものと見えますが、それにしては、誠に、質樸なことでござります。抑、長屋王も、質樸なる室を建てゝ、天皇を招請奉り、天皇も、此の草葺、黒木の家造を喜ばせ給ひ、萬代までと祝し給へる譯は、皇國は、神武天皇、大和の橿原に、皇居を御建て遊ばしてより以來、御代々々樣、儉素を本として、苟且にも、奢侈に流れ給はぬのが、何よりの御美德にて、此の大御心の礎が、石造よりも堅く、煉瓦造よりも丈夫にして、則、萬代迄も、虧けず崩れぬ基でござりますれバ、其の質樸なる所が、大に、思食に適ひて、斯る御製もあらせられたことかと存じます。さて、御代々々樣が、儉素を御尙び遊ばした證據は、澤山にありますれど、其の著きものを擧げますならバ、伊勢の皇太神宮の御建築でありまして、此の御宮は、天皇の、第一に、御尊崇あらせらるゝ皇祖の御事にてましませど、何程、宏壯を盡くし、結搆を極めて、御造營あらせられても、よろしき譯なれども、草葺、白木の質樸なる儘にて、御式年毎に、御造替遊ばすのは、則、皇祖の、儉素を尙ばせられし御心を御心として、御改にならぬことと窺はれます。又、大嘗會

の折も、さやうでござりまして、是は、天皇陛下御一代に、一度の、此の上も無き重大の御儀式にござりますれど、亦、何程、善美を盡くし、綺麗を極めて、御執行になりましても、然るべきことでありますれど、やはり、黒木の御殿、草葺の屋根など、素朴を尙び、決して、御變更あらせらぬのは、是ぞ、則、石造、煉瓦造よりも、長久に、相傳はる基礎となるべき御美德であらせられます。但、かく申せばとて、今日、文明、日に進み、家屋建築の法も開け行く世に、强に、往昔の草葺、板屋を慕ふではござりませぬが、世の文野に拘らず、人の貴賤によらず、夫々、身分相應に、節儉と云ふことを守らねばなりませぬ。恐ながら、聖上にも、御祖宗以來の御儉德を守らせ給ふことは、臣等が、常に、親しく伺ひ奉る所でござりまして、其の一端を擧げて申しますれど、去る明治六年、皇居炎上ありしより、今年まで、十七年の久しき間、此の赤阪の假宮に、御住居遊ばして、少しも、御窮屈、御不自由に思召す御氣色を伺ひ奉らず。然るに、臣民たるものの心には、一日も早く、皇居御造營あらんことを懇願し奉りて、炎上の時より、積々、獻金も致しましたが、聊、御急の御模樣もあらせられず。又、御造營の費

額も、思召を以て、御減少になりましたやにも、仄に承りまするが、此の思召が、即て、草葺、黒木の家屋を、御賞玩遊ばされました、先皇の叡慮と、符合いたし、誠に、有り難き思食でござります。いづれの國の歴史を見ましても、國の興る時には、必、儉素を尙びまして、國の傾く時には、多くは、奢侈に流るゝが、殆、一定則のやうに思はれます。どうぞ、是から、末々の天子樣も、此の御儉德を御繼承遊ばされ、萬代までも、虧けず崩れぬ皇居に座まして、天下を統取し、下萬民も、亦、上の御心掟に傚ひ、分相應に、儉素を守り、奢侈に流れぬやうにござりましたならば、これが、國家を保つ礎にして、即、天下泰平の大基本となりまして、此の上も無きめでたき事でござりませう。

さて、此の御製を、今年の御講書始に、進講致しまするのは、近き内に、宮城へ、御移轉遊ばさるゝに就きまして、恰、新室を祝ひ給へる御製なるが上に、此の天皇の一の御名を、新しき家と書きて、爾比閇と稱し奉りし故、旁、御徙轉に、めでたき緣故と思ひつきまして、此の御製を講じまして、御新築の皇居を祝し奉るの微意を寓しましたのでござります。

右は、それの年一月の御講書始に、御歌所長高崎正風大人の進講せられたる、その大意を筆記したるものなりとて門生某氏より送り越されたれぞ、こゝにをさめつ。

# 漫錄

## 女子は有りたきもの

鹽井雨江

女子に有りたきものは、其の心情の、大海の底の深うして濁らざる、蒼天の廣うして隈なき、岩はしる水の清うして澌きせざる如く、かつは、山の櫻の朝日に薫れるが如く、美うして潔ぎよかる事。

人にむかひたる言の葉の、春のあしたの鶯のごとく、妙にて數多くいはざる。あるは、秋の夕の鈴蟲のごとく、涼しくしてやさしかる事。

さては、其の姿、其の振舞の、呉竹の柔順しうて直なる節の籠れるが如く、あるは、姫小松の、艶美ならで、ゆかしき操の匂へるぞかりなる、それならでは、雪の中に咲ける梅、雨にこぼるゝ櫻、露にはゝゑむ床夏、霜にかをれる白菊、風にさはらぬ青柳、春の野の蝴蝶の袖、秋山の尾花の袂、さ

たかりの姿振舞こそ、女子には有りたけれ。

漢やうのいかめしき書、むづかしき儒者の理は、え讀まずとも、大和ぶりのやさしき書、優なる女子の物語などは、あまねからずとも、かつ〴〵は讀みたる。さて、文字なども、眞字のこちたきは、絶えて書きまなばずとも、假字のうつくしきを、はしり書えせずとも、滯らずなよやかに、書きならふことをばかりはしたる。さる女子こそ、あはれなれ。

こと〴〵しく角立ちて、おだやかならぬ、かの漢詩などは、作る道も、謡ふ業も、知らずまねばすあるとも、昔の人のいひけむ、力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をも、あはれと思はせ、をとこ女の中をもやはらげ、猛きものゝふの心をもなぐさむるといふ、此の敷島のやまとの道の程は、作る心、謡ふ術ばかりは、知りも好みもしたる女子こそ、上なうあはれなれ。よしや、巧ならずとも、上手ならずとも、名人といはれずとも、歌聖と稱せられずとも、唯、おのれが心情をのべ、言の葉にあらはす道をだにさへ知れた、よかれ。やがて、心情ある人てふことの、見ゆるがいみじきなり。

文章なども、かの信屈とやらむ、贅牙とやらむ、角だちたる漢ぶりなど、さては、横ざまに、あやしき姿に書き綴る夷のさへづり文などは、わきても、え出來ずとも、清女が艸紙の手すさび、紫女が雨夜の慰、さる雅致なる幽邃なる、さる艶麗なる優美なる文章のゆかりを、かたかりも、うつさ

ひと志したる女子、かたちばかりも、まねばひと勉むる女子こそ、上なき上のあはれなれ。書なども、堪能にあらずとも、景色など、けしきばかり書き、花鳥など、かたちばかり寫すこそ、又、女子に、こよなくふさはしかるべき事なれ。大かた、世の中に美術といひ、技術といふほどのものは、女子の爲すべきものとて、有りたきや。衣服など、容易く巧に裁縫ふは、必、ありたく。糸繰るわざも、いとまあらば、かへす〳〵ありたく。厨屋の務も、つとめて、なみ〳〵は、知りてありたく。家の調度などは、常に取り紛ぎれぬやう、物事に、世の事に、事細やかにありたきも、これは、さはいへ、塵ばかりの、さらぬ方に、細かなるは、なか〳〵に、汚くおぼゆ。

すべて、上なるを尊び、下なるを憐まむやうありたし。それは、女子のみのことにはあらず、女子は、わきてもしかれといふなり。夫もたゞ、まめやかに仕へ、子まうけなど、母のみ庭の教、露ふかきこそ、女子の道とて、ありたけれ。

## 伊勢物語と紫式部日記と

蓼川

伊勢物語といふは、昔男のゆかしき心などを種として、伊勢といふ女が、やさしげに、あはれに、作りなしたりといふ物語。紫式部日記といふは、式部が上東門院に仕へたる頃、見き、思ひし事を、これかれと、自、紫のゆかしき筆の色もて、染めなしたるもの。いづれも、ゆかしく、忘れ難く、け

に、これもかれも譲らず、勝劣も見わぬ文。唯、おなじく、ゆかしくあはれなるが中に、又、またく、趣のかはりたるは、一は、おもしろきを、むねとせる物語なるに、一は、あきらかなるを専とせる日記なるが故と、又、書きたる時の、おなじからぬが故と、書きたる人の、好の異りたるとによれるならむ。

伊勢の方の優れたるは、歌の心深く、詞つよく、姿あてに、匂ひこぼれたるきはにて、定家卿も、和歌を學むむには、伊勢物語をよめといはれしは、誠に心ある語にて、貫之が、業平の歌を、しぼめる花の如しなど、あげつらひしは、貫之は、心も姿も、やさしきを好みて、業平のごとき、詞つよく心深きは、好まぬが故なりけむ。文も、又、一かど優れて、言葉も句々つゞまやかに、短く輕く、けうらなり。つゞまやかなるが故に中々に、心深く。輕くけうらなるが故に、洒々落々、氣慨に富めり。事もなげにいひすてながらに、詞の外に、限無き餘情を殘せり。されど、後陽成天皇と申し奉る天皇は、かしこくも、歌のはしがきに、伊勢のこそ優れたれと仰せられ、長明といふ人も、歌よまむと思はむ人の、學ぶべきものなりとこそいひたれ。

紫式部は、まめやかにやさしき女なりけり。されど、此の日記の文も、又、まめやかにやさしかりけり。心のまめなる、詞の細に美しく華かなるは限もなく、筆あくまでゆきあまりて、詞の外には、心も殘さず、いひといひつくし、かきとかき

つくしたり。句は長く、なよ〳〵といひつゞけて、はてもなう、柔しうあはれなれど、さすがに、かよわく力なげにおぼゆ。ある人が、誠に、女子の、ものすべき文といひたるも、道理にこそありけれ。

今、此の日記と、此の物語との文をのみ取りて、比較すれど、又、面白きふしあらむ。山にしたとへなた、伊勢物語は、深山幽谷を行くが如き趣あらむ。木の根蟠り、岩角聳え、千丈の厓、千仞の涯、此所を斷ち、彼處を隔て、絶えては、又、路あり。つきては、又、奥あり。斷々に絶えつゝ、探ぐれど、何處を限とも果しともおぼえず。いとど、奥深き心地す。式部の日記は、翠の遠山を、遙に見わたしたらむ趣あり。つぎ〳〵にひき續きて、雲のひろがれるがごとく、霞のたなびきたる如く、七重も八重も、一條に引きつゞきて、見るまゝに、はてもなく、限もなく、末は天にも通へるけしきあり。

水にたとへなば、伊勢物語は、谷川の流に似たるならむ。岩にたぎち、岸にくだけ、瀨と成り、淵と成り、あるは、急に山の嵐の下すが如く、あるは、俄に百雷の轟くが如く音たてゝ、近よる方も、あたるべうもあらぬ勢あり。式部の日記は、青海原の潮にやたとへむ。八重のみつしほ、千重のうしほ、唯、やう〳〵と流れて、見わたせば、雲井をも浸し、天地をも包みたらむばかりのけしき、八重の海原も、唯、一面に打ちなびきて、ひろらかに、おほらかに、流暢たるは、式部の筆の優れた

る所。野にしたとへなど、伊勢物語は春の野、式部の日記は秋の野ならむ。春は菫、つくし、花茅、若草の袂、うらなつかしげに萌え出ではすれど、千草の色、唯、おなじ緑に、遠近、僅にうすくこく染めなすのみ、千紫萬紅をてらさず。されど、けはひの、唯、何となくうらゝかなるは、春の野邊。伊勢物語のつくらぬさまに似たらむか。秋は薄、尾花、女郎花などの七草の、思ひ〳〵のあはれは、いはずもあれ、千草は千色にさき匂ひ、八千草は八千色に色づくりて、千しほ八千しほをつくして染むるは、秋の野邊。式部の日記の、詞を飾り筆をあやなし、つくりにつくりたるけぶりに、似たらむか。

月にたとへなど、伊勢物語は、春の夜の月。式部の日記は、秋の夜の月ならむ。春は、照りもせず、曇りもはてず、霞の奥より、おぼろに匂ふ月、影は定かならず、明ならねど、薫は、なか〳〵に、何となう奥ゆかしく、げに、えくものもなきけしきは、春の夜の月、思へど、伊勢物語の、おぼろげにいひすてたるけしきに、似たらむか。秋は、露のしづくに天すみわたり、霞も隔てず、雲もつゝまず、隈もなき月光、明に照りわたるは秋の夜の月、式部が日記の、細にゆきわたりて、餘す所なく、明にいひつくして殘る隈なき筆にや似てならむ。

花にし譬へなば、伊勢物語は、雪の間にはゝゑむ紅梅の、おもては花やかならねど、奥は、なかな

かに優艶なるに似たらむ。式部の日記は、雨の中に咲き匂ふ櫻の花の、おもては、あでにつややかに見ゆれど、裏は、何となうしぼみて、かなしうあはれに思はるゝさましたるは、式部がものはかなげなる心もて、優に花やかに書きたる故ならむ。松にし譬へなば、伊勢物語の筆の、優ながらに、つやなく飾なきは、岩根のもとの老松の、幾年か風に吹かれ雨にうたれて、幹も枝も、やつれながらに、さすがに、すぐれたるに似たらむ。式部の日記の、形をつくり、姿をよそほひ、つやをそへ、飾を連らねながら、なよ／＼と、力なげなるは、庭の姫松の、葉末の緑は、色も香も濃く、みぎははいよ／＼榮えつゝ、幹枝などの、素直にやさしげに、なよ／＼としたるさまに似たらむ。

若き女子にたとへなば、伊勢物語の文は、賤の山家のたわやめ、式部の日記のは、玉だれのをす深き窓の姫にや似たらむ。詞つゝまやかにあらはにて、句の短く延びかねたる、半いひて半盡くさず、半あらはし、半包みたる筆のさまは、山里の賤の女の、荒栲の衣の、色もなく香もなく、短く疲れたるを着たるが、ものいはむとしていはず、言の葉もたど／＼と、僅に語りて、つゝれの袖を引きよせて、はづかしげに、隱れたらむがごと、なか／＼に、心の奥のゆかしく、深くあはれにて、いひ盡すに勝りたる心地する、式部の日記の文の詞美しく柔しく、句のなだらかにすなはなるは、玉だれのをす深く、やむごとなき姫の、錦の衣に、玉をちりばめ、綾の袂のゆら／＼と靡くばかりな

るを着させられしが、青柳のなよ〳〵と、ものごし柔しげなるさまに、かしこまり給ひて、柔しく美しくしとやかなる言葉もて、ものあはれなるもの語し給ひたらむごとき氣しきに似たらむ。

山は深山幽谷を行くも、遠山を見るも、水は谷間を流るゝも、青海原のはてなきも、野邊は春の緑も、秋の千しはなるも、月は春のおぼろなるも、秋のさやかなるも、花は雪間に匂ふも、雨に濡れたるも、松は岩根にあるも、庭の姫小松も、女子は山家の柔しきも、錦のうちの美しきも、皆、おなじくあはれに、なつかしからぬはあらじ。

これもかれも、大かたにあはれのものなり。唯、いづれもあはれながら、趣はとり〳〵に變りたり。式部の日記の文、伊勢物語の文、あはれは、いづれか勝り、いづれか劣るべき。これも勝れたれど、かなたも勝れたり。唯、文の色、筆のあと、あはれの露は、これかれゆかりを異にしたり。

伊勢物語と式部の日記とを讀みて、そが文を比べなば、思ひあたるけじめはかゝらむ。又、そが中に、いひつること、演べつるこゝろを比べなば、聽て、おもしろきけじめあらむ。物語の方は、昔、色このめる男ありけりといひて、そが、をかしき世のちぎり、果敢なき世のまじはりのはし〳〵を、何ともなく、かいつらねたるのみ、大かたは、たはれたるいたづらなるものゝやう聞ゆれど、讀む時は、詞の外のこゝろあり。そは、二條の后の、わかうておはしゝほどに、ぬすみ出でゝ、「行くさき遠く、夜もふけにければ、鬼ある所なりとも知

らで」といひ、又「鬼一口にくひてけり、」といふわたり、鬼とは心ありていひしげなり。あるは「むかし男、ふして思ひ、おきておもひ、思ひあまりて　わが袖は草の庵にあらねどもくるれば露のやどりなりけり」
といふ。ふして思ひ起きて思ひたる事は、何になりけむ。よしありげなる心かな。又、京をうれたく思ひ、東山に住まむとて、

すみわびぬ今はかぎりと山里に
　身をかくすべき宿もとめては

といひたる。何が故に、京をうしとおもひけむ。女子を慕ふにしあらば、こゝにもかしこにも、ゆかりの人ある男なるを、京を捨むと思ひし心、何がゆゑなりけむ。世に住みわびたる、何の思ふやうならぬ事ありてなりけむ。思へば、人知れぬ恨やありけむ。又、これたかと申す皇子を訪ひ奉りて、

わすれては夢かとぞおもふおもひきや
　雪ふみわけて君を見むとは

といひて、泣きと泣きたりといふ。何にかゝれる涙なりけむ、袖の雫のきかまほしや。又、

おもふ事いはでぞたゞにやみぬべき
　我にひとしき人しなければ

といふに至りては、決して、唯に、色好める、たはれたる男の心のみとはおぼえず。あはれ、思ふこととは何なりけむ。世の中の人と異り、世の中の人の思はぬ事を思ひたる、此の男の獨思ひたることは、いかなる事なりけむ。思へば〳〵、深く

よしありげなる奥ゆかしき言葉ならずや。此の物語の、詞の外のこゝろといふは、此に在り。此の物語の、唯に、色好める男の、敢果なき語草とばかり思ふべからざることは、こゝに在るなり。こは藤原氏のはびこりて、大内の影くらきを歎きたりといふ業平の日記を本として、作りかへたるが故に、かゝるゆかしき心の、さすがにえ包まず、自、こぼれて匂ひてなりけむ。

式部の日記は、紫式部が上東門院に仕へたる頃、御産あらせられしわたり、見たる事、きゝたる事、書き連ねたるなれど、古のさるわたりの事、知らむよすがとならむ事は、今更よいふべきにもあらず。げに、公卿、殿上人などのさま、上臈中臈などの姿、その頃の風俗人情衣裳など、細に、明に、書きわけたるは、もの學ぶ身の、是非に讀むべきものなり。しかのみならず、此の紫式部といふは、才も操もすぐれ、心もあくまでまめやかに柔しき女子にて、しかも、わが世と頼みたる人に遅れてより、もの心細き世の中の、折節の筆にしあれば、あでにときめきたるわたりのけしき、はなやかに美くしう書きながら、心は露ばかりも仇ならず。もの柔しげなる心、もの細げなる姿、あはれにかなしう、女子の鑑ともなるべき影あり。あからさまにかゝで、みどころもなき故郷の草木を見るにも、物むづかしうおもひ亂れてといふあたり、露か、時雨か、讀む袖もしめるばかりになんある。

## 或人歌をよみたし歌書をよむ順序いかにしてよからんといふに答ふ

鈴木重嶺

予答けらく、先、古今集一部をくりかへし見て、なかバ記臆するにいたらバ、後撰集より以下、新勅撰の頃までの撰集、および、古今、六帖、月詣集、其頃迄の家々の集をも見るべし。但、千載以下はよろしからぬ風調も見ゆれバ、なべての例にはしがたし。これらの姿を、凡、心得て後、萬葉集を見るべし。此集も、とると取ざるとあり。後の志らべに、耳遠き古言をまじへては感少し。所謂、ぬえ歌となるなり。こゝろすべし。古學ひらけてより、此頃までの歌集も、いとまわらでも見るがよろし。四五百年以前のよりは、まさりたるがあるなり。古歌のよろしきを繰りかへし見れバ、自然と、其姿うつりて、よろしき歌いでくるものなり。よき音の鶯のもとに、藪鶯をおけど、其の志らべをおぼえて、だみたる聲はうするものなりと、わが師、素行翁、門人にさとされき。努々、後の撰集、ことに、新題林集などをも見るべからず。損ありて益なし。萬葉は、契沖阿闍梨の代匠記、眞淵翁の考、幷、別記、千蔭翁の畧解あり。まづ、畧解を見て一通り辨ふべし。土佐の鹿持雅澄の古義はよろしけれど、大部にすぐ、八代集は、北村季吟法印の抄、こは十に三四ならでは、とるべき所なし。されど、八代集の全備したるは、此本をよしとす。契沖阿闍梨の餘材抄、眞淵翁の打聞、宣長翁の遠鏡、其他、香川景樹の正義等あ

り。歌の意を一わたり解するには、遠鏡よろし。後撰集も新抄といふあり。中山美石の註なり。四季の部のみ上木となれり。新古今集は、美濃の家づと(宣長)尾張の家づと(石原正明)あり。歌の解かた、正明のかたよろし。さて、師につきてとふことは限あれば、註釋を見て解しかたきを尋ぬべし。四五百首よみ出たらん後には、てにをは、語格の書をも見るがよろし。

言葉玉緒 宣長 ひも鏡 仝上 あゆひ抄 富士谷成章 かざし抄 仝上 言葉八街 本居春庭 靈語指掌 林庭秀賢 其外にもあり。

又、假字違ひたるは、はづかしきものなり。契沖阿闍梨の和字正濫抄、是は、いにしへより、かなに定まりあることを、はじめて見出されたるなり。古言梯 楫取魚彦 是は、再版のかたよろし。古版は於遠おき所違へり。小折本にて、山本明清かものしたる、倘古假字格、簡易にてよろし。歌を書くたびごとに心を用ゐんには、三四年にて、凡、違はぬやうになるべし。順朝臣の和名抄、新撰字鏡、是は流布の本は二巻なり。十二巻の寫本あるよし。いまだ見およばず。ほしき物なり。宣長翁の字音假字づかひ、是らは、いづれも坐右を放たれず。さはいへど、かいなでの頃より、てにをは語格にのみかゝづらひては、歌ちゞみて、中々に思をのべがたきものなり。たゞ、前にいふ古事を多く覺えて、一首のすがたを專一とし、姿凡調ひたる後、語格の學問にかゝりたる方よろし。古歌の解しがたきをとひ、歌數多くよみ出んこと肝要なるべし。

## 地方の人の征清のことに熱心なるを見て

横井知萬多

軒毎に、旗、提灯などかけつらね、處々に、緑門などつくりて、よろこびまへるは、祭とはきかぬに、何の日ぞ。これなむ、わが征清の軍が、勝の報えたる時なりける。おのれ、此のごろ、都を立ちいでゝ、或地にものしけるに、山の奥なる、形ばかりの樵夫が里も、海の果なる、けしきばかりの漁夫が村も、おしなべてかゝらぬはなし。世には上べばかりのものもこそあれ。山のおく、海のはてなどに住へる民は、素直にして、かざりといふことなければ、このうはべの樣こそ、即、心の奥底をも見るに足るべきものなれ。さては、日比、あらき衣を着、まづしき物を喰ひて、貯へたる金も、をしむ色なく、恤兵部に奉りて、兵士の勞苦をなぐさめ、戰死、病死などの報ある折は、わが業を打ちすてゝ、遠き道をもいとはずおもぶきて、葬の式にまじらひ、はた、遺族をなぐさむるなど、親、兄弟を失ひたらむ時の如し。わが父、わが兄、既にかゝり。幼き兒等も、いかでか倣はざらむ。さては、兵士だちたる人を見れば、手をあげてはめはやし、いつも、雄々しきことのみにして、遊ぶやうになりぬ。あはれ、かく、忠なる人たちの子弟にして、今、みな、征清の途になり。この殘れる人たちのこゝろは、よくしれり。されば、内を顧みる憂なし。かれ、安らかに勇みすゝむ。安らかに勇みすゝめばこそ、名に高き險所も、たやすく、うちとり得らるゝならめ。戰は、戰を

生出すとかいへば、こたびの戰は、又、やがて、戰の起る初ともなりぬらむ。よし、ならばなれ。百千の戰ありとも、いかで懼くに足らむ。いかで恐るゝに足らむ。かく忠なる國民の間に、人となり、はやく、其のさまを見ならへる今の幼兒等が、生ひ立ちて、兵士となりたらむ曉には、今よりも、いよゝつよく、いよゝ勇ましくなりて、我が日本の國の御稜威を、いよゝ、遙なる境に、しき及ぼしなむ。さては、今の國民が、征清のことに、心ふかくつとむるは、自、幼兒の心にしみて、その心をして、いよゝかたくつとめしむるしるべとなりなむ。そを思へば、いかなる山の奥の民も、いかなる海の涯ての民も、いさみすゝみて、いよゝ、この事につくせよかし。いつも、祭の日のごとく、よく愚なりといはるゝまで。世に狂はしといはるるまで。

## 萬歲　井上頼文

和訓栞に、神樂歌に千載あり、本は千歲とうたひ、末は萬歲とうたふ、これより出でたるにやと見ゆ、閑田耕筆に、千秋萬歲は大和より出づる者一種類なり、萬歲村ありとぞ、河内三河などよりいづるものその類か、京師にては陰陽家の人、小泉よりいづ、これは禁裏仙洞后宮などばかりへ參りて世に普くはしらす、壽詞五段すこぶる古雅にて、大鼓一調をもてはやすとなん、かの大和の者は普く民間をもめぐり、舞態、詞がらもやゝくだりてけぢかく、十餘段小鼓もてはやすさま世に知るごとし

と見ゆ・かゝれば、雅俗の差別ありて、兩派に分れしなるべし、さて近き世まで民間に行はれし萬歳も古くよりありしことにて、臥雲日件錄に、文安四年 正月の段に、一種乞食革歳首人家に到て祝言を歌ふ、世に之を千秋萬歳と言ふ、前後逐來る右に百錢を與ふと見え、三十二番職人盡し歌合に

　立ちまへるせんず萬歳いづくにも
　　けしきぞかりの祿ぞかひなき

とあるにて、今のごとく門ことに立ちて、祿を得しことは證すべし、但しその頃のは、法師の裝束きて、烏冠をかゝふり、扇を持ちて舞ふさま、左の圖の如くにて、今のとは異なりしなり、また維新まへまでの姿をあらはさむため、次に、英一蝶の畫がけるもの擧げて、いさゝか其の變遷のさまを記るす、さて今のは、昔時のとは、いたくおとりて、烏帽子も着けず、素襖もせず、たゞ胡弓をひき、鼓を鳴らして市中を廻りあるくが多かるは、明治九年十二月十八日東京府達甲第百五十一號に府下從來之習慣にて、萬歳又は厄拂せきぞろ杯と唱るもの詮議の筋有之自今禁止候條此段布達候事とあるに因てなり

こゝに擧るものは、則、職人づくし歌合勸進ひしりうた合にいづるものなり、今のさまに、大きに異なれど擧ぐ、

千秋萬歳御師





ちなみにいふ、萬歳のうたふ歌は、六條新法華經、地割、伊勢、三河、加賀、などありて、歌も、節も、おの〳〵ことなれど、もはら、東京市中を、うたひあるくもの、ひとつをかゝく

東京萬歳

太陰陽鶴にも勝し龜にもまさりしめで度も「御つるの前にやそまに、こがねの砂も敷ならべて、千代もかさねて、萬年までもさき榮えて、御代も久しく、御家も榮えてましんます、そふちやうや、あら玉の年のはじまる朝たにはな、りんゑやうてふの玉のかんむりてふべにめす、あやが太刀をはいて、はこびやるきじんが刀を、腰にさす、ゆづり葉を口にふくみ、五葉の松をてに持てな、寶の君のげんじの御門につゝ立てな、ないしの御門をおゑひらくおしや分てさむらはずよ、ゑんもんないより久しはかるべしためしには、水も若やぐ木目もさいて榮ゆる、とみが頻りにくる、祝ひの門とぞはめ悦んで、吉京の立の御萬歳、アヲ戌亥の角よりもに丹羽とり、こもずのしやう〳〵、烏丸、あしたか、熊たか、あまたのたかを引つれて、くじやくせんそうへなんなく乘こんで、つる〳〵つゞくらとたゝかへば、くいなのまへの玉袋、わがり下りいたしますひよふぶの鳥や、こま鳥や、云々太やれ〳〵才ろくはよいところを祝ひたれば、旦那さまの御ゑう義がさらりさつと濟だれた、奥さまの所へ腰元遣ひの女郎衆が參るぞや、才、女郎衆にとりては田舍の女郎衆は、いや〳〵とおはすれぞ、上方で尋だした、女郎衆が參るぞや才、云々

「その又女郎衆御名をバ、かずへだして聞しやうがいらず才「ち／＼めん／＼に聞たいもんだての太「お糸女郎に、こいと女郎、小梅、こ櫻が、ばたんに、芍薬、桔梗なんぞと申する女郎衆が參るぞや、才才「おみなめしに、かるかやの女郎衆も、相添て參るかいらの太「その又女郎衆はぬいてのきいた針てのきいた云々才今織を後帶にしやんとして旦那様の御門口見かけて、八尾の雪踏に、こふじ革のもみたびで、とづまなんぞをしやんと取て、あれからがしやらりなら、是からもしやらり、中のゑやらり／＼／＼才「しやらりしやんと參た女郎衆は先に立たがおせんさん、後にたつたがお松さん云々

才「となか／＼誠にめでたうさふらひけるが、太夫さま太「さふらひけるのところがいらぬ、御旦那さまには、若水かきり〻やゑやんとかはらせて、上臺所から下臺所までしやうき萬事おしなめて、めでたいところ御祝ひ申せ、才六はきたかよ才、才云々太「やれ／＼才藏は御旦那さまのゑはふの角より福の神のよはらゑやつた聲をき〻やつたか才藏才「ヲヲとこ、太夫さん、おまちやら、おや／＼こまちやら申せ、是よ、是わいヤアレ才ざうヤアレ才「太夫さまが萬歳ならホ〻かやうに申才藏は太「尾張の國や、三河の國や、か〻さの國チヨトか〻さの國とは才藏のい〻まちがへ、わかさの國なる八百びく云々お目出たい中のかいの才藏やヲヤよい所をはやして、この參るまいもすれバ、昔は白川で天王さまの御とき熊野のごんげん様へ、御三家の御

渡らせのみぎはみぎはヤアレ年始の萬歳樂がかむりたるチヨーゑばしのさ左り折や、かざをりなぎの葉の二枚もたわむれバ、是よ西が三十三ヶ國なら、東も三十とさ國じや云々、才藏やヲヤよい所をはやして此まるるまいもすれバ、此方さまの恵方だなのまんまへに、年の神を祭るまつり申せバ、

くだ物の珍ぶつにとりてはゆふごに立花、かやにかち栗、椎實だい〳〵や、金柑までも飾立、朝熊山の裏白や、熊野樣のゆづり葉、姫こに小松に藪こふじ、松や竹を賑かに年の神を祭る、千年の御祝ひ萬歳樂までも

# 花ふゞき

## その八

塩井雨江

しは燒く浦の、いぶせさは、みるめ刈る海士の子の浪わけ衣、むすび馴れにし袂にだにさへ、なは住みからきのといふ苫屋なるを、こは花の都、月の宮居、錦閨玉裡の奥ふかく、天なるや、雲井の上のおん身と、仰がれましまし給ふ一の宮と申し奉るが、思はさりける人世の、塵の嵐に吹き立てられ給ひて、神ながらのおん身の

末も、遂に、給ちはふ竹のみ園生の、みがきのもとに、風月の眺、靜かなるおん世の、おん心に任せ給はずなりて、難波の浦の海原遠く、八しまの灘の浪路はるかなる、南島の孤村、畑といふ所に移され給ひて、よそに聞てだに、うきふし玄げき笹のまろやを、纔かに、露の起きふしの、宿とせさせ給ふ、世のさがと、おぼしさとり給ひても、今更に、めづらしきうき世の、おんたゝずまひのほどならむ。

朝有井の三郎といふは、荒浪の磯には似ず、さすがに、やさしき島守なりけれど、夕のおんものより、晝夜のおんかしづきなど、疎ならず、心を盡くさゞるにもあらざれど、一の宮のおん心は、絶えて此處にましまさねば、みけしきは、常に安からず見ゐ給ふも、おん道理や。

軒なる山邊の雲を、花にたぐへても、見なば見む。されど、諸共にかざし給ひし人なきを如何にせむ。門ちかく磯うつ波を、絲竹のねにたぐへても、聞かむきかなむ。さても、おなじ窓にすさばれし伴なきをいかにせむ。あまのさへづり、なほ宮人とおぼえても、すぎなむ過ぎむ。さはいへ、語り馴れ給ひける人のみの、見え給はぬを如何に玄給はむ。思ひくらして眺め給へば、月の入るさも、ありつる山にあらず。

思ひ沈みてふし給へば、松のよあらし昔にはあらず。思ひあかして出で給へば、天つ日の登るも、あらぬ海原の末なる、げに、めづらしき空にやおぼすらむ。はる〲と、雲井をふりさけ見、つく〲と、天が下をうちわたし給へば、万上のおん父君は、北海の新島守。千里の民草は、水火の苦境。思ひてを見給へば、なかなかに、南洋の遠浦、寂寞たる配所の朝夕も、なほ更に、胸やすからずなりもまさらせ給へど、風なくてこぼるゝ峯の椎柴、萩の下露、おん涙の、もろくも茂くも見え給ふものから、武文は、とさまかちくま思ひまどひて、御息所のおん迎にとて、堀河へ上らむと乞ひたるに、幼きよりかしづかれ、笠置の矢ふゝき太刀風の間にも伴はれ、海山をも越えて、遠く引きぐし給ひたる武文に、斯くなりて、暫時とて、別れむは、あらぬおん心地せらるれど、人のおん上、都の方のなりゆきをも、しろしめしたくおぼすものから、武文の求むるまゝに、新らしきおんぞをも、作り添へられ、忍びやかに、都の方へ立たせ遣り給ひたるは、秋の半、空わたる雁がねの鳴くねもしきりつ。とばそにかよふ小男鹿の聲、ひまなき頃なりけり。こなたも、思ひわたり、空かけりて待ちたまへば、軒端の薄そよぐにも、戻りやし





つと、おん耳を立てられ。門なる波のよするにも、かへりやすると、おん眼を放ちたまはず。待ち詫び、思ひくらし給へど、武文は、いかに去つらむ。秋もいつしか更けゆきて、穂にあらはれて招きたる尾花の袖の、うらかるゝまでに成りゆきても、たよる姿なく、音づるゝ影なきおん身一つのみ、心細さや、如何なりけむ。尼ケ崎の不慮の難義、武文が最期、姫のおん末をも知ろしめすよしなけれど、呉竹のよにふるまゝに、うつりにうつりゆく、あさましきわが世を、はかなきものと思ひ捨てゝか、都へは去りたる。いな、いかでか、武文。さとかり、いひがひなき男には、ゆめあらず。歸らぬは、海にや溺れたる。山にや仆れたる。さはいへ、魂魄となりてだに、歸り來ぬものならぬを、思ひて見れば、隱岐にまれ、堀河にまれ、人の上に恙やありたる。いかにか、くれにかなど、おぼしめぐらし給へば、いよいよ置く方もあらぬおん心地なり。

畑に移され給ひてより、文机をのみ友とせられ、終日終霄、離ち給はぬおん書の面も、如何にせむ。み心の、いよ〳〵はてなく、あこがれ給へど、文字ざまも定かならず。現ともなく、夢ともなく、おぼつかなきおん心地のせられ、文机を假の御枕

にまどろみ給へば、あな待ちわびにたる武文、何時の間に歸りやしけむ。なげしの下にかしこまりたる、痛くうちしほれたるのみか、ものをもいはで、さめ〳〵と泣く。やは武文かと躍り立ちて、その手を取らむとしたまへば、なさけなや、心と見ねたる幻の、徒におん目に殘るのみにて、人はあらず。もの音に驚かされてか、警護の武士は、二人三人、なげしに立ち寄りて、御けしきを伺ひまゐらすれば、宮は、あらず、つれ〴〵のあまり、手枕を友としたるに、よしなき夢に襲はれにたりと仰せて、何氣なくうち笑まれ、汝等も朝夕の警護、主に仕ふる身とて、難義ならむ。いで、おもしろき物語あらば、きかせよ。われも思ひ倦んじたり。荒磯の底にも、玉藻あり。岩根の下にも、忍の草ありときく。新參と思ふ汝より語れと、一人に向ひて、仰せ給ふ。

いで、さるゆかしきことは、おぼえ候はねど、やつがれ、此度、難波津よりたより候船路のほど、ゆかしの香の唯ならぬおんぞの、舟先にかゝり候を、舟士ども拾ひ上げ候て、天つ姫のきさせ給ふ物か、龍宮のたわやめのまとふ衣にやなどのゝしり候を、餘り貴げなれど、價を遣りて、寶にとて持ち歸り候ときこゆ。宮は、なにと

なう、おん胸さわぎのせらるゝに、あな、そはおもしろき物を拾ひたる。いかならむ衣ぞ。綾はいかに、色はなにぞと問はせ給ふに、人の答ふる樣、武文にもたせ遣りたる御息所のおんぞに似たり。

宮は、み心動の、いよ〳〵たゞならねど、あはれ住吉の浦わに、天津姫の舞ひたる、浦島の兒が龍神に遇ひたる昔語は、こゝらきゝつれど、まのあたり見ざるを、面白や、その衣、如何なるものぞ。疾く見まほし。汝、誠ならば、取り出でゝ、疾く見せよと仰せ給ひ、軈て持ち來るを見そなはせ給ふに、こはいかに、こは〳〵いかに。おん衣は、まさしく、武文にもたせやりつるなり。あはやと思ひ給ふに、おん心も怺へさせられず。おんぞを取らせ給ひしまゝ、あはやふし沈まむとしたまひしが、さすがに、よそを憚りて、慟じもせられねど、しばしは、御ぞをまもりたまひたるまゝ、おん言葉も無かりしが、何を思し給ふらむ、二郎を呼べと仰せて、奥へ入らせ給ひぬ。

# 一本萩

柴田千稻

## 其の一　春の庭

常に、額には箭を受くるとも、脊には箭を起てまじと、勇み雄健ぶ關東武士の、槍を横へて一度都の雲を蹈めし、宇治川の急湍も深しとせず、木曾氏は粟田森の寒草の上に霜の如く消え、鉾を提げて南海の波を分くれし、鵯越の絶壁も險しとせず、平家の塞は、忽ち瓦解して、一の谷の巖頭血紅き事錦の如く、あはれ、大内山の櫻の盛を我物顔に狂ひたりし蝴蝶も、羽をしばめて、西海の潮の花に迷ひ出で、祇園精舍の鐘の音に長き哀を殘して、驕る平家は久しからずと、口さがなき京童に謠はれけり。是よりして、天の下の武士等は鎌倉幕府の命令を仰ぎ、千紫萬紅の秋の千草の、飄颯たる金風に拂はれたるが如く、頭を低うして、京洛の花の美はしさを忘れて只すら、鎌倉山の硬骨たる森の蔭のみを喝采す。

かくて、幾回の春秋を送りて、鎌倉山の森の梢に薄き霞の棚引き初むる頃、實朝公は幕府の君として仰がれ給ひぬ。されど、兼て伊豆山の奧深く、枯れたる梢に氷の

如き月の光流れてかゝり、嵐に咽ぶ猿の聲の霜に枯るゝ折、修禪寺の筧の水は落葉に隠れて絶え絶り、哀れなる無常の鐘の音なひは公が枕邊の夢に響く。あはれ、御兄君は北條氏が毒刃に罹り給ひしと悟り給ひてより、炎ゆるが如き熱涙は、清き美はしき御頬を洗ひ、不忠不遜、邪逆隠險なる北條一族、討ちてきためんとおぼし起せど、悲しい哉、獨の御力に及ぶべくもあらねど、僅に其蓊積せる鬱憤を三十一文字の言の葉の露に代へ給ひ、躍るが如き熱情を強て抑え給へど、夜更けて庭の虫の音の繁き折々、慷慨の御涙は滴として御枕に音をなす。かゝれば、御側にかしづき給ふ御臺所の、如何で之を知り給はぬ事のあるべき、言に出でゝは宜まはねど、君の胸中を汲み給ひて、御心の内には常に、時雨の雲の晴るゝ時もなかりき。

其御心の奥を汲み知りたるか、將知らずや、上の好む所は下之に習ふといふ諺に洩れず、三十一文字の大和言の葉は、大奥の帷帳の元に繁く弄ばれて、曉の曙光の閨院の翠簾を浸す頃より、夜更けて草葉に置添ふ露の音の繁き頃迄、桃李の霞を分けたるが如き婉麗なる者、海棠の雨を蒙りたるが如き妖嬈なる者、梅花の雪の中より匂ひ出たるが如き清楚なる者、各綾羅錦繡の裝を飾りて、恰、彩雲を分けて下り給

ひし天宮の嬪姫の集まりたるが如く、互に纎手に兎毛を走らせて詠吟し、或は風にたぐへ雨にかこち、或は花よ心を寄せ、或は月に哀を訴へ、勝劣のけぢめを競ひて、春の日も長きものとは覺えざりけり。

かく許多の局女房の集まるが中に、御臺所の特に哀れがり給ひて、御側を離し給はぬ松島の局といふあり。佐渡の守親泰が娘にて、今年は漸く十八の春を迎へけり、實に、松島とはよくこそ名付けたれ、其心は、海の面の恰も磨ぎ澄ましたる明鏡の上を玉顆の轉ぶが如く、いと清らかに、小嶋の松の操の千歳も變らぬ色を含み、楚々たる其容貌は異香を送る梅の莟の如く、嫋々たる其擧動は、青柳の糸の霞に煙るが如く、自ら許多の人の目を引きて、局の名は熊髭髼々たる武骨武士の口にも上りけり。

頃は彌生の空うらゝかに晴れ渡りて、咲き亂れたる萬朶の櫻は、見渡す限、野にも山にも輝り滿ちて、人の心に雲井に囀ずる雲雀の聲の空にあくがれ、平常は落着きはらひし武士も尻自輕く、烏帽子を横樣にかつぎて腰の太刀も重々しげに、七里ヶ濱の軟砂の上を蹌踉として逍遙ふ者引きもきらず、かゝれば、閨閤の奥にもそれぞれの御催ありて、御臺所も折々は御庭におりさせ、時に落英を雲鬢に宿らせ給

ふこども多かりき。それにつれ、許多の局女房共は三々伍々手を引き合ひて、嘻々として笑ふ聲は庭の中を動かしけり。折しも彼方の築山の蔭より出で來りたる一群の女房は、眩きばかりの羽衣霓裳の好を飾りて、語りては笑ひ、又笑ひては語り、徐に此方へ來かゝりしが、やがて一人の女房は袖を口に掩ひて笑を忍びつゝ云ふ。聞こしめせ、彼の秋の紅葉の炎ゆるが如き紅き御顔をして、磯馴の老松の圓き御體を重々しげに搖ぎ歩き給ふ嵯峨野樣の、何としてか暫く見え給はねば、御病氣かと思ひしに、可笑しや、人は木の芽も春の伸び／＼とする時なるに、秋の枯野に迷ひ出でゝ妻呼ぶ鹿の、戀の闇路に迷ひ給ふとか、ホヽヽ、箇樣の御方にも戀てふ物のあるものにや、ホヽヽと、堪へ兼ねて笑ひ倒れんとするに、又一人は、鼻筋の元に小皺を集めて、あな笑止、彼の恐ろしき眼ざし、彼の苦々しき御顔の、戀に窶れてしはたれ給ふ樣を見たや。枯野の中の一本薄、物思ひに惑はれて、右に靡き左に横はり、かの逞しげなる御体も、さぞ細うなり給ひけん、ホヽヽ、いざ諸共に訪ひ行かばや、ホヽヽヽと思はず高らかに笑へて、先きに立ちたる一人は顔の狀格をさへ崩して、ホヽヽヽ、鬼にても戀はあると云ふものを、野薊艸の秋惱にしは

たれたるも、又一人の風情なくてやは、其御名の嵯峨野の奥の草を分けて、さゝやかなる菴の中に想夫戀の曲を演で給はゞ、又ゆかしく優しからんを、いざ來ませ諸共に勸めまつらん、ホヽヽヽヽ、ホヽヽヽと、一同に撻と腹を撚つて笑ひ崩れバ、其飜へる袂の風に煽られて、木枝の櫻の花は舞ふが如くに翩々たり。三ヒラ四ヒラ。やがて漸くに笑を留めて、彼方を顧れば、あな、何時の間に來給ひけん、廊の上に花を眺めて御臺所の立たせ給へり。一目見たる此方の者共は、思はず胸を躍らして顏を茜の如くに赤くなし、氣付き給はぬ内にと、慌たゞしく木の間に影を潜めけり。知らぬもの丶如くもてなし給ひし御臺所は、やがて其跡を見送り給ひて、微笑を口元に洩らさせ給ひ、後に從ひまつりし松嶋の局を顧み給ひて、のう松島、彼の者共の、何をか樂しげに語り行きしを、親らがありたる爲め、慌てゝ隱れたる可笑しさよ、貰に春といへば、かく迄に樂しきものかと、云ひさし給ひしまゝ暫し御言葉なく、痛く御心を惱まされ給ふもの丶如く、力なげに頭を打伏し給ひて、やがて、親らが心の中は悲しみの種のみ植ゑられて、秋の空の曇り勝にのみ日を送り、時雨の露の袂に乾く時なく、難波の蘆の束の間も立迷ふ雲の晴るゝ折もなく、長閑なる春の曉、

朧ろげなる月の夕暮、世の人の樂しく暮す此頃も、嘆きの淵にのみ沈み果て、わびしき日影の元に暮らす身のはかなさよ。君が御心を汲みまつれば、月も花も、如何で樂しからんをかしからん、喃、松島、察してたもれやと、堰き上る涙を止めあへ給はず、御袖を顏に押當てゝ泣き伏し給ふに、松島も堪へ兼ねて御側に進み寄り、其御嘆はさる事に候へど、いつ迄もかゝる事のみは侍るまじ、搔きくらす時雨の雨も只一時の間の露けさに候はん、神も佛もましますものを、如何で惡深き者を許し置き給はん、御心を慰めて御嘆をまぎられし給はれ、見そなはせ、時ならぬ雪を散らす櫻の花のをかしさを、額つき美はしき蝶鳥の戯れ遊ぶを見そなはし、御歎きを慰め給はれよと、言葉を盡して勞はりまつれど、痛はしの御事よと推し量りまつれぞ、自我心も搔亂されて、果は堪へ得ず、袂を掠めて落つる二三滴、涙か將た露か。御臺所は、漸くに涙を拭ひて顏を擡げ給ひ、無益ざる事に涙を落して、御身の心をも痛ましてけり、許してたもれや、最早歎きもすまじ思ひもすまじ、如何に歎きたりとて詮術のあるにもあらず、かく儘ならぬは憂世のならはしにてあらんと、御袖に目元を抑へ、悄々として、起ち上り給へど、松島は身も世もあられぬ思ひに、牙を

噛みしめて御答へ申すべき言の葉も出で來ず、茜なす夕日の光は櫻の梢を流れて、鐘の音はゆるやかに花の雲に響けり。

# 文林

## 早春雪

花をこそこゝろにいそげ春たちて
またぬにふれる今朝の雪かな
近衛　忠煕

更にまたみ雪ふるなりあまぐもの
いづこか春のたちもらしけむ
毛利　元德

冬の日にかはらで雪はふりにけり
こよみばかりに春やたつらむ
東久世通禧

かきくらし雪はふれども積らぬは
春になりたるしるしなるらむ
鍋島　直大

うぐひすの聲を聞つるあしたより
はるとしもなくつもる雪かな
前田　利嗣

山さとは春のひかりのおそくして
まださむげにも見ゆる雪かな
津輕　承昭

春もけふたち枝の梅にふりかゝる
雪こそはなのはじめなりけれ
長岡　護美

久かたのそらには冬のこるらむ
はるきてのちも雪のふりつゝ
前田　利鬯

たつ春の日かずのいまだ浅けれど
ふかくもつもる今朝の雪かな
竹屋　光昭

たちかへる春としもなく風さえて
山のはしろくゆきはふりつゝ
本多　忠貫

春くれど梅のたよりのおそくして
池田　政禮

まだかせさむみ雪ぞふりける
水野　忠敬

春たつとおもひて見れどこの朝け
のどけくつもる庭の雪かな
前田　利昭

梅にちりやなぎにかゝるしら雪も
春のはじめはのどけかりけり
長谷　信成

ふりつもる垣ねの雪にはるもまだ
浅きしるしの見ゆる今朝かな
小出　粲

風さむみふりとけかねて春さめは
またも雪けになりにけるかな
坂　正臣

春まちてさきたる梅のはつはなを
　みせじと雪やふりかくすらむ
　　　植松有經

梅もさきやなぎが枝ももえいでむ
　はるしも雪のふらぬ日はなし
　　　内藤存守

ふる年はむなしくすぎしそら雪の
　春になりてぞふりはじめける
　　　大口鯛二

なかなかに冬はおほ方のどかにて
　はるのものともなれる雪かな
　　　鎌田正夫

たちかへる春のけしきも見えぬ哉
　うめもやなぎも雪にうもれて
　　　松本高明

朝かぜははたさむけれど梅が枝に
　つもりもあへぬ春のあわゆき
　　　千葉胤明

小松はらのこれる雪のうへにふる
　はるの雪こそまづはきえけれ

元旦　　　平塚雎鳩

天地もあらたまりゆくこゝちして
　まづあふがるゝはつ日影かな

新年松　　　三輪義方

松のみはふりたるぞよき物ごとに
　年のはじめはあらたまれども

新年述懷　　　大町芳衞

年どしにいよいよさかゆく大御代に

ふりまさる身を數つべしやは

新年霞　石丸　忠胤

今朝みれバ昨日の空にたちかはり
かすみにゝほふ天つ日のかげ

初春祝　松岡　調

春風にとけしこほりにひきかへて
千代をむすぶ野べのわか松

元旦　高田　顯允

事しげき昨日にかへてのどけきは
年たつ今朝のこゝろなりけり

寄海祝　大堀　德資

大御代ははるかに見ゆるわたの原
かぎりも果もあらじとぞ思ふ

元旦　松本　道別

ひさかたの天の八重雲おしわきて
とよさかのぼるはつ日影かな

早春雪　鍋島　榮子

春立ときくより野べに來て見れバ
わか菜はもえて雪ぞつもれる

柳原　愛子

たちそめし霞は消ねてひさかたの
そらかきくらしあわ雪ぞふる

松本　健子

かきくらし降とはすれど且消ねて
はるを見せたる今朝の雪かな

小池　道子

餘りにもあたゝかなりと思ひつる
そらさえかへりあわ雪ぞふる

かすむかと思ひし空のかきくもり
はるとはいはず雪はふりきぬ　鶴 久子

新年友　安東 菊子

したしきもうときもとひて呉竹の
よにうれしきは年のことほぎ

鶯告春　園生 鶴子

君が代の千代のはじめの春きぬと
けふよりつぐるうぐひすの聲

## 歳暮の感　横井知萬多

明治廿七年といふ年は、忘るべからざる年なりけり。旱魃、洪水、地震などなきにはあらねど、天災は、いかにともすべからず。國の光を輝かすべき征清のこと、今、なほ、全く終れるにはあらねど戰ふごとにかちすゝみて、かの國の王城に攻めよせむも遠からじ。また、外つ國々に、我が國の秀でたる國、雄々しき國といふ事知らしめぬるは、喜ばずてやは。されど、國の上につきてのことは、人、皆、よくしれり。おのれは、たゞ、おのれにおける事をのみ、かいつゞけて、後の思出ぐさにもなさむとす。おのれ、東京にいでゝ、今年ばかり、おもしろく、うれしかりし年はあらざりき。おもしろしとはいかに。見ざりし處、いと多く、見て得しこと多かりければなり。そは、東北にては、仙臺、鹽竈、松島、石卷、渡波などの處々を見、又、汽車の上なれど、白河の古城趾、那須の篠原を始めて、沿道の、目にふるゝ限は、見ざること

なし。又、西南にては、徳島、撫養、鳴門、高松などの處々を見つること、これなり。この間にありしめづらしきことゞも、名だゝる處を見て、古今のことを思ひおこし、感あまりて、あるはよろこび、あるは悲しび、あるは歎き、あるは恨むことあるも、遂には、面白き種子とならざるはなし。うれしとはいかに。こたび、父上、母君、兄弟、友人などを、故里に訪ひしこと、これなり。故里にものせむには、東海道をすぎ、瀬戸内海を經ざるべからず。富士の高嶺、興津、濱松、舞坂あたりの海つら、琵琶の湖水のけしき、京都、大坂の山水はもとより、淡路島を、左に、須磨、明石を右に見わたしつゝ、のりゆく船の中の心地、去る人ぞしらむ。まして、讃岐、伊豫の島々は、われを送り迎ふるが如く見ゆるをや、この千々のめづらしき景色にもまさりて、なほ、めづらしき心地せらるゝは、有りしまゝなれど、わが門、わが家、おや、はらから、歸りぬときゝ、やがて、とひくる友人など、うれしさ、いふばかりなきこと、これなり。年月はまたず。かく、面白し、嬉しと思ひしことも、夢の如くにて、今年も、今は、くれなむとす。何ばかりの感慨ぞ。されど、をしめばとて、止まるべくもあらず。たゞ、來む年には、いかなる事か出來む。仙臺、松島をはじめて、こゝばくの地は、大かた、大きなる異變はなかるべきも、おのれら人の身の上は、きのふの如くならじ。來む年、はた、今年の如くあらむや。老少不定とはいへ、父上、母君は、おのれ、一年を加ふると

ともに、又、一年を加へますは、さらぬことなるべし。おのれは、二とせ、三年を、同時にとりて、ひた老に老いぬとも、父上、母君に、年の重らざらむやうにあれかし。さらずとも、父上、母君のみの年は、暮れずもあれかし。來む年も、今年の如く、二たび、はた、三たび、よきつてあれかしと、さまぐ\におもひ沈むも、年に別るといふことの、うけれとぞかし。かくおもふ心を、父上はしり給ふやいかに。母君はしり給ふやいかに。文しやらねど、しり給はずもあらむかし。

## 田家の生活　　山川鵜一

翁さびみやまかくれにいはりして
　いもにくまするさとのゆふ酒

斯る人の心こそ、いとゆかしけれ。刈穂の稲の貯へは多からねど、一年を支ふるには足りなむ。柴の戸はゆがみがちなれど、露をしのぐよすがとはなりぬべし。鷄の一聲鳴き渡れば、東の空少し明りて、春の日もやうく\さしいづめり。媼、かひがひしく立ち働けば、翁もやがて起きいづらむ。翁の笠傾けて出で行くを、媼は、後方より、今日は早く歸りませ、さかな殽多調へ置くべきにとて、見送る。

をちこちの田の面は、目も遙に見渡さるゝに、男女のおのがじゝいそしみいたつく、いとにぎやかなり。遠くそほどの如くに見ゆるは、鍬によれる人なるべし。近く伏猪と疑はるゝは、屈みて草ひく少女なりけり。翁はひねもす立ちくたびれて、

くろのほとりに、煙草薫らしつゝ、ほゝゑみゐたり。そのおもては、春風に波立つ千草よりも豊げなり。去年の大雪は、里の子に寶得させたり。あなたふとなどと獨ごてり。

やがて、思ひいづることやあるらむ。すげ笠引よせつゝ、つぶやけり。長き日も早暮れむとすらむ。むゞがいかに待ちわぶらむ。いざとて立ち上りつ。小川の水音、野邊のすみれ、翁も目をとゞむる様なり。斯くて、橋を渡り、あぜをよぢて、やうやう門邊にたどりつきたるは、たそがれすぐる頃なりけり。嫗は、まめ〳〵しく、たらひ持ちいでたり。痛く待ちわびつ。酒温むべきに、早く、すゝぎ賜へとて、忙はしく釜にほたさし添ふるさまなり。

廿日あまりの月さしいでぬ。ひるまの汗の香ふきとるめり。花は殘なく散りたれど、みづ〳〵しき青葉は、白玉こぼるゝばかりなり。翁は足うちはどきつゝ、しはぶきせり。あはれ、この月よ。あはれ、この流よ。ちゞが心を慰むること、いく年にか及べる。あはれ、塵の世の糸竹も、柴の戸の細き烟には及ばざりけりとて、嫗を見やる様、心ありげなり。げに、廿年あまりの昔思へば、夢のやうなりけり。うつゝともなき浮世の醉と、この山里の醉とは、痛くかはれるかなとて、嫗は酒杯あぐるさまなり。如何ばかり樂しかるらむ。



# 雜報

●新年　一夜を隔てつる許なれど、荒玉の年立ちかへりては、人の心も浮き立てば、家鷄の八聲も花やかに聞きなして、やをら、臥處を起き出でつ、まづ、若水結びて、朗々と、豐榮登る初日影を拜む心地、えもいはれず。一族打集ひて、壽酒汲み、壽詞かはすに、祝ふ雜煮の湯氣も霞みだちて、閑けさ限なし。常は、物むづかしき大路小路の樣も、青やかなる門松、笹竹、注連飾に、氣色だちて淸らなり。うなゐ子らが、春の錦の袖振りかざして、羽根つきかはすも優しく、嚴めしき洋服、袴などいふ禮服つけたる男どもの、丹塗なす赤面に、ところ〴〵、白き物つけ、あらぬ所に、八字髯作られたるなど、彼も此も、とり〴〵に、をかしからぬぞなき。げに、立ちかへる春ぞかり、閑けく豐なるものはあらざらむ。只、今年は、皇大君の、廣島に出でましますをもて、文官武官の、百の官人達が、嚴めしく綺羅びかなる服裝して、參内する姿の見えぬこそ、少し物足らぬこゝちすれ。さはいへ、御國の御稜威は、四方の夷國國に輝きて、今年よりは、我が　大君の治しめす國土、彌廣でると思へば、是も恨むべきに非ずとて、吾人は、寶船を枕に、北京城陷落の、いとも、樂しく、めでたき、勇しき初夢を見たり。世の諸嬢はいかに。

●華美の弊　女は髪服装といへど、成る限は、善き衣服を着、美はしき容姿するも宜けれど、さりとて、夫も、程といふ事越えては、驕奢の沙汰となりて、いと惡しかりなむ。殊に、學の庭にある少女達は、衣装容姿に、心がゝづらふやうにては、學の道の敢果どらで、悔しき事ぞ多かるべき。別けて、東京の小學校の惡弊は、運動會、祭日などに、女生徒の、綺羅を飾りて、我劣らじと、華美を競ひ、甚しきは、他の衣服の善惡をいひて、誰の帯は、去年の天長節の折のと同じ。呉の襟は、先の運動會につけたるものなりなど、品評のつらき物から、貧しき家の娘達は、學校に出づること能ぬ有様なりとか。今は、運動會の惡弊は、新聞の攻撃強きよりして、少しく止みたるやうなれど、尚、祭日の弊は止まぬぞ、憂てき事の限なる。あはれ、世の教育家たる人々、亦、父兄たる人達、能く意注めて、之が救濟の道を勉め給へや。尚、いふべきは、日本橋邊の、或小學校には、商人の多き土地とて、女生徒の服装を見るに、皆、かの藝者とかいふ者の、浮たる姿を眞似て、厚く膨れかへりたる裾を蹴出し、色濃の縮緬の前垂を付けては、茶屋女の風を學ぶなど、淺ましき極を盡すといふ。かへす〴〵も口惜しき事どもなり。

●歌を詠て遠征の良人に贈る　目下、征清第二軍に從ひ、金州城に在る、第一師團歩兵第一聯隊中隊長歩兵大尉藤田顧次郎氏の夫人は、四谷區北伊賀町十六番地に住み、名を敬子と云ふ。資性温順く、容姿端麗にて、夙に風雅の道に遊びで、月に

花に三十一文字を弄び、又能く、家政を督して、一女の教育を怠らざりしが、良人出陣の際、汽船高砂丸に乘込み、宇品港を發せんとする由を聞いて、取敢ず、

舟の名を聞くもめでたき高砂の
まつはおのれのこゝろなりけり

と一首を詠みて、朝夕武運の强からんことを祈り居りしが、先頃も、戰地より來れる良人の消息を聞き、坐に、戰地の人々を思ひやり、左の歌を詠み、良人の許に送りしとなん。

寒夜遠征の士をおもうて

ものゝ夫も三笠の山やしのぶらむ
北風さむき冬の夜の月

●閨秀の怨　世をうし込の、赤城下町に住む、小宅何子といふは、大尉小宅何某の未亡人にて、十年あまり以前に、夫に放れてより、夫が遺身の一人の女を、手の中の玉と愛で寵しみ、悲しがり、さま〴〵のうき艱難して、養育てあげしは、花子といひて、今年、十九の春を迎へたり。花子、其の名に背かで、花の顔、柳の容姿、嫋々として、美麗に臈たきは、今の世の人とも思はれぬ程にて、光る許と記されし、昔物語の中の姫君の上を、思ひ遣られぬ。亦、其の性、殊に温順くて、書讀み、歌讀み、或は、琵琶、琴、生花、茶の湯などのすさび迄、慈母のしつけに心得て、至らぬ事なきより、ゆかしがりて、貴顯き方より、妻に嫁にと、懇に望まるゝ事ありしかど、母は、家名繼がす愛女なれバとて、嘗て許さず。さるに、むすぶの神の引

合せにや、長き縁わりて、去年の長月の頃、陸軍に奉職むる、或軍人を婿に迎へて、四海浪靜に式を擧げ、めでたく海老の契を結びぬ、新婦新婿の、未、うら恥かしき中に、嬉しく樂しき月日を送りけるが、月に村雲、花に嵐の怨は免れぬ浮世の習慣とて、結婚て、まだ、一月も經過ぬ中に、新婿は出軍の命を受け、胡沙吹く、唐の荒野に向けて出立ちぬ。御國に盡くす、勇しき門出に、涙は不吉とて、花子は、悲しき情を堪へ忍びて、飽かぬ中の、袂を別ちしかども、思へど、我が身程、敢果なき者はあらじ、幼くて父に別れ、母が慈愛の手一つにて、漸く、人となり、夫を迎へて、是よりは、二人して、母上を慰さめ參らせ、今泣うけし、海山の御恩の萬一だにも、返し參らせんと思ひしものを、情なや、まだ、馴染さへ淺き間に、早、何時を限と知らぬ別とは、さりとは、つらき浮世やと、玉の緒絶えなむ許に、泣き悲しびて、夜は、涙に床の枕を浮かし、朝は、起き上る力もなげに、窶れ果て、寢くたれの容姿、哀といふも愚なり。されど、いかに歎けばとて、夫の歸るべきにも非ず。妾も、軍人の子にて軍人の妻なり。などか、何時までも泣き悲しみてのみあるべきと、雄々しき心振り起して、其よりは、母を慰め、甲斐甲斐しく立ち働き、又、母子二人して、日毎に、伊勢の大神を拜み、只管、良人の無事と武功を祈り居るといふ。健氣の事なりかし。偖、花子が、別の際、よみし歌なりといふを聞くに、

文送る事かなはぬときゝて別のをりによめる

この後の文のたよりは春さらむ
やがてかへらん雁につてまし

# 餘芳

## いせまうで

坂正臣

をはりの國、知多の浦に、男ありけり。年、廿まり五になりにけり。このとしになれるを、所の諺に、厄といひて、よからぬ事の有るべきやうに言ひてぞ忌みける。されど、さるべき、神佛などに詣で祈りて、祓ひやらふを、常の事とはしけり。この男、なま物識にて、世俗のいひならはしなどを、うべなどず。厄などをも、心にはかけざりけるに、母なん、堅固のむかし人にて、伊勢の大宮に、まうでよといひける。男、さらでも、まうでまほしく思ひわたりけれど、たゆたはずぞ、いでたちける。

それの年、文月の晦の日の、辰の時に門出す。はやうと思ひつるを、この日しも、父の忌日なりけれど、その祭のわざなど、とりまかなふ間に、時移りにけり。うからなる人、ひとり、伴ひてゆく。まづ、産土の神にまうでゝ、旅路たひらけくと祈る。大納言光友侯の葬送いとなみ給ひしあと、今は、只、淺黄なる花の、咲きおほひたる

棉畑となりぬ。その中道を、ゆきすぐれば、長山とて、松のなみたてる所あり。ここに、駒の松とて、東の方の尾上より、遙に、見渡せる、馬のさまに見ゆる松あるを、木の下にては、中々に、さるけしきもなし。この駒よ。おのが、七八の年頃より、目なれてあるを、十年ばかり、遠きところに、ゆきてありし程に、浦風にや、ふき惱まされけむ。いたう、憔み、悴けたるも、あはれなり。

千代のすゑなはなかやまのこまゝつもおいのやつれはかくれざりけり。」かけといふ里を過ゆく、その名もしるく、なかば、欠落ちたる、山の麓にぞ、里はありける。また、名和といへる、長き里をも經て、大高の邑にいでつ、東の、こだかき丘の上に、氷上姉子神社しづまります。倭武尊の牀さるらんか。あはれ、あね子はと、よみたまひし、そのかみの事ども、想像れて、あはれにたふとし。御祭とおぼしくて、傘鉾といふもの、引出て、村中ゆすりたり。諸人の心、いかに、樂しからんとおぼゆ。さるは、今年の、田穀の豊けさは、年ごろ、見も知らぬばかりに、彼方、此方の、千町、八千町、足穗八束にしなひ繁りて、いと所せきまでぞ、おし累りたる。前の輪といふにて、車に乘る。鳴波の驛に入りて、八町畷といふ松原を、西へ

ひきゆくまゝに、笠寺を過ぎ、山崎の坂をも下り、正午すぐる程に、熱田の驛に着きぬ。座金といふ家に入りて、ひるの物たうべ、濱に打出でゝ四日市に渡る。蒸氣の舟に、のらんとするに、今日は、辰の時にのみ、一度かよふ日なりといへど、はいなくて、いかゞせましと、まどひぬれど、この驛に宿らんも、餘に、日高ければ、堀川の渡をわたり、又、車にのりて、名も知らぬ里々をすぎゆく。これなん、近き頃、新はりしつる、桑名への道なる、車は、たゞはせにはせて、早くも、福田につく。こゝよりは、歩みてゆくに、川あり。さて、長き堤を經て、鳥ケ地とか、あやしき名の里をゆき、六條といふあたりに來ぬる頃、脚、いたう、疲れしかば、路のべの、ふせ屋に、腰やすらへて、水こふに、あるじ、獨住のものと見えて、あたり塵打積りて、きたなき、いひしらず。汲置ける水も、なければにや、やをら、前なる大河におりたちて、桶ながら、くみもて來つ、その水の中に、小き魚の、ふたつばかり、ゆくりなく、すくはれ來て、驚きつゝ、およぎめぐれるをかし。

あめつちもとみにせまりぬいかさまになりゆく世かと魚やおもはん

前ケ須に着ける頃は、日既に、多度山に隱りぬ。舟にのりて、桑名にわたる。岸の蟲

のね、ものさびしう、あはれ深きに、月あらましかばとぞ覺ゆる。ほどへて、舟はてつ、川口の、錢屋といふにやどる、

はづき朔の日、雨そぼふりて、わびし。車やとひてたつ。まちや川を渡り、小向の里をすぐ。こゝは、萬古燒といふ陶物、つくりいだす所なり。舊の、桑名の殿人、蓮池眞清ぬし、これが記をかゝれたるを、おのれ、桑名に在りしころ、見たりしに、めでたきみやびごと以て、いと、つばらかに、かきとゝのへられたりき、寫し置ばかりしをと、今ぞ悔しき。富田の里にて休らひ、さて、又、名も知らぬ所々を經て、四日市の帶屋といふに入り、こゝにて、車を換へ、追分をすぎゆくに、高岡川といふ淸き川瀬あり。今より、十年ばかり前。大神宮へまうでしかへるさに、この河を、うちのぼりゆきて、笠殿のみやしろ、能褒野の御陵など、拜みつる事ありき。こたびは、遙に、ぬかづき奉りてぞ、すぎゆく。神戸の驛をへて、白子に、午すぐるほどにつく。晝の、をものたうべつ。庭は、浦回にうちつゞきて、浪の音、すごくきこゆ。さて、立いでゆくに、小雨、なほ、はれやらず。わびしきものから、また、をちこちの、野山のけしきは、いひしらずぞ、めでたき。

溪態峯容奇且清。　新寒透骨激吟情。
山靈似慰吾人意。　故使雲煙送又迎。

申の時ばかりに、阿濃の津につきぬ。こゝの町は、世に、長きものゝたとへにするごとく、ゆけど〳〵、ゆきも盡されず。縣廳、新に築かれて、光り輝きて見ゆ。藤枝より、また、車に乘りて、雲出川を渡り、酉の時ばかり、松坂にいる。宿は、こめやといへり。

二日、天氣よし。松坂をたつ。辰の時すこし前なり。町のさま、淸らなり。埴橋のほとりにて、車にのる。今より、五年ばかり前、母に隨ひて、大神の宮拜みに參りし、かへるさに、山室山なる、本居大人の墓にまうでんとて、此の小川づたひに、尋ねゆきつるに、雷なり出て、いとおそろしきを、ねんじて行く程に、一人の法師にあへり。山室は、まだ、遠くやと問ふに、答へて、拙僧こそ、山室の寺に住むものなれ。伴ひてんといふに、いと嬉しきものから、また、小説などに、をり〳〵見ゆる、山賊の、人かどはすたぐひにもやなど、暗鬼を生じて、うしろめたく思ふも、いとわか〳〵しきや。かくて、妙樂寺に着ける頃、夕立、いみじう降り頻りぬ。折

しも、五月の末なりけれど、寺の庭を見出すに、萩すゝきなどの、らうたけなる若葉の、風にゆられて、露ふりこぼすさまも、面白く、あはれなり。晴間得て、うへの墓所にのぼるに、近きころ、御社いできつるにつきて、道も廣く造られたり。年頃、仰ぎ慕ひつる心の、ふかければにや。山のたゝずまひ、木々の葉色も、この世ならぬこゝちしつゝ、御前にはらばひ、垣根をめぐりなどしつゝ、ねもごろに、拜みまゐらす。うしろの方に、平なる岡ありて、見渡、えもいはずよし。寺にかへりつれど、日いと低うなりぬ。あるじの僧、出來て云ふやう、このあたりは、竹の子、いと多く、生出でゝ、味も、よそのには、ことなうよければ、へつくりて、もてなし參らせんに、今宵は、いかで、こゝにやどり給へと、すゝむる詞の、ねんごろなるに、眞心顯れて見ゆれど、曩の鬼胎も消えて、いふがまに〳〵、事定めたるぞ、あるじ、よろこべるさまにて、さらば、御湯をまゐらせん。この寺の浴室こそ、日の本に、類多からぬ物に侍れ。湯あみながら、遠くは、尾張の知多の浦、近くは、伊勢の海の清き渚、さては、松坂の市街など、手にとるばかりに、見渡され侍り。いざ、入りて見給へといふ。まことに、いふが如し。さりながら、この湯槽、久しう

用ゐずと見えて、水出しやる穴に、さしたるせんの、能もあひかねて、下なる竈に流れ入れば、焚けどもたけども、火は消え消ゆるに、あるじ、心いらちて、手すきとりかけなど、いとかひがひしう、はせめぐりて、つくろひ成さんとするさま、たとしへなう懇なり。やがて、母をはじめ、伴へる三人なから、皆、浴了りて、休らひ居るに、飯笥もて來つ。見れば、筍を、ちひさく切りて、あまた、入れたるを、いと高く盛りたり。菜として添へたるも、皆、竹の子なりけり。のたまひつるも著く、かゝる、珍かなる御饗たまはる事の嬉しさなど、口々に謝辭しつゝ、舌打ならしてたうぶ。世に似ずうまし。夜になりぬれど、あるじ、また、いで來て、かたらふちなみに、歌まきめけるもの持いでゝ、もし、御墓に、手向たまひしみ歌も、おはしまさば、こゝに、書付けさせ給へなどいふ。ひらき見れば、名高き大人たちの言の葉、あまたあり。それらには、立並ぶべくもあらねど、やをら、考へしらべつつ、筆とりぬ。

足引の山室山の　岩が根を千代のすみかと
しめませるふたりの大人は　すめ國のまことの道の

まなむしら學びの親
はやくより慕ひたふとみ
今日しもこゝにまゐ來て
ま袖のそばつも知らず
裳すその染むをも知らず
かゞじ物膝折伏せ
鶉なすいはひ拜み
男道なきわれにはあれど
まなび入るいにしへまなび
やごゝろに思ひ兼ねしめ
うましふみかきもあらはし
うつそみの世の人みなを
さへづるや常世のからの
かりにもまよふことなく

わがとものをしへの父と
仰きつる心だらひに
繁立る杉のしづくに
山かげのはにの色に
御社の垣にとりつき
御墓の四方をめぐりて
ねもごろにねぎまつらくは
大人たちの御あとをとめて
たどりゆく神代の道を
その道のしるべのふみの
口づから說きて諭して
彌廣にをしへみちびき
蟹がゆく横さまごとに
各も〳〵神の御すゐの

すめぐにの赤き心の　御民てふ名にもたがはず
天皇にまめなれかしと　朝夕にいそしむわざに
靈幸ひ助け給へや　神靈の眞柱の大人
秋津彥瑞櫻根の　大人の二神

短歌

大人たちの千とせのやどゝさきませるやまむろやまを見らくしよしも
またひ來て今日ぞをろがむまなばしらまなびのおやのおくつきどころ
たらちねのはゝもろともにまたひ來てをがむもうれし大人のおくつき

（つゞく）

兼題

一月廿日
歌……………鶯告春
文……………伊勢詣の記

二月五日
歌……………小式部內侍
文……………梅を見て

やまとなでしこ

# 大和撫子

鹽井雨江

## 第一編　出陣の卷

### その一

「來れ美佐緒や雪も來よ。
汝等にきかす事のある。
我が身このたびかしこくも、
おほみ言葉を賜はりて、
あすは舟出ぞ御國をば、
天皇御軍の先鋒に。

### その二

「朝鮮の荒野は風さやぎ、
王の光も消えうせて、
世はぬば玉の闇なれば、
もろこし山の荒えびす、
時知りがほにはびこりて、

肉取りきそふ聲すごし。

その三

「かくときゝまし我が大君
心情は深き我が大君
いかでかよそにうち捨てむ。
はるぐ\御言を寄させられ、
えびすの王に敎ふれど、
かれはそれをも聽かぬなり。

その四

「日本も朝鮮も支那も

おなじ海邊の國づくり、
嵐ふきなば波立たば、
うらの悲嘆は、諸共に
問も救も爲すといふ
おのづからなる道あるを、
よそに踏みたり支那は。

その五

「むすびも固き友がきの
朋の國まし仇なすは、
やがて皇國の仇なりや。

つくす教のきかれずば、
いまは赦さじ夷をと、
あやにかしこき我が天皇は
雲井にふかきおんいかり。

その六

「されはぞ美佐緒、雪もきけ。
光もかげも明らけき
この日の本の御旗もち、
えびすさやだつ支那の
野くれ山くれ照らせよと、
御詞たまはる我が軍。

その七

「露の命のおきふしに、
國の守と取りよろひ、
天皇のみ楯と磨きたる
ますらたけをの劍太刀、
時は來にけり試すべき、
をりは來りぬ盡くすべき。

その八

「いざや皇旗を押し立てゝ、

萬里の城の木の葉をも、
唯一もみにもみちらし、
黄河の水に駒を飼ひ、
踏みもひしがむ北京城。
日本男兒の晴の業、
汝等もいはへ、我が爲に。

その九

「いはでもあるき事ながら、
なれ武士の妻となり、
なれ武士の女にあれば、

夫が手なれの梓弓、
父が根ざしの篠矢竹、
わが一筋の心をば、
美佐緒も知らむ、雪も又。

その十

「いてはかへらぬこの弓矢、
折れではやまぬこの劍、
こをあけくれの我がこゝろ、
軍たちせば武士の
生きて歸を待ちなせそ。

ゆくをかぎりと我も思ふ。

その十一

「よしや散るとも花もみぢ、
あかき日本の花もみぢ、
もろこし山の青草を、
からくれなゐに染め盡くし、
散りなば花の身のほまれ、
汝等もいはへ、わがために。

その十二

「さはさりながら我が妻よ。

---

汝に遺すは、此の雪子。
すぎし三とせの秋のくれ
天皇の親しく賜ひたる
民の教にたよりつゝ、
頼むや母の露おもを。

その十三

「雲井の庭の近衛兵と
今や仕へむかの武雄、
かりの便の有りもせば、
かれに報げてよ我が言を、

『手束の弓のつかのまも、
天皇の御前な離れそ』と。

その十四

「雪にも遺す事のある。
父は往くとも、母そばの
はゝのみまはの露霜の
露の教におはしたち、
咲けや撫子、いろ清く。
たてや撫子、香も深く。

その十五

「父がたからの紐がたな
この一ふりを今此處に
汝が守護に留めなむ。
父がみかげとうちむかひ、
汝が身に添へよ、今よりは。
つるぎぞ父が魂魄なれば』

その十六

父の少佐の取り出でゝ
わたす錦の紐がたな、
雪子は取りて、幾たびか



押し戴けるもろ袖の
いろもやさしき若草や、
ゆくすゑこもる其の姿。

その十七

「天皇の御言を賜はりて、
父が出でます皇軍に、
あも武士の女にあれば、
歸は待たじ、泣はせじ。
父のほまれの來ます日を
數へて待たむ母上と。」

その十八

「流石よ我が女きこえたり。
美佐緒は如何」と見かへれば、
「わがせの言のをかしさよ。
天皇御軍のさきがけは、
太刀取る夫の身のほまれ。
聽て我が身のほまれやな。」

その十九

「さらばいはゝむ諸共よ、
すめらみくさの門出をば。

美佐緒も來れ、雪も來よ。
世は面白く成りにき」と
取る杯に、いくたびか
のむや支那四百州。

その二十

「さらば父上ほまれあげ、」
「さらばわが夫功勲えて、」
「かへりな待ちそ妻子よ」と、
往くも殘るもやまと人
雲井の上の朝日かげ
うち仰ぎつゝ別かれゆく。

## 第二編　別後の卷

その一

言葉は流石かをれども、
なは若たけのよの數は、
わづか十歲を積む雪子、
「庭の撫子なよしかも
おをれやゆく」と謠ひつゝ、
はしりの水を灌ぐなり。

その二

何をか思ひ出づるらむ、
むすぶ衣手うちおきて、
とみに立ち寄る母の下。
「のう母さまよ、支那山の
かなたの暑如何ならむ。
いかにか父のおはすらむ」

その三

思ひ沈みて唯一人
ながむと見れば何時か又
いざなふ友にさそはれて、
小松の蔭にたはむれつゝ、
清水の袖にあこがれつゝ、
蝴蝶に似たる女の童。

その四

くるれば又も母のそば、
「千代に八千代にさゞれ石の
巖となりて苔のむすまで」
聲もやさしき君が代の
唱歌も何時か夢の中

「父よ〱」といくそたび。

その五

身にははかねど劍太刀
さすがにたけき心よは
こゝら馴れまし母美佐緒、
よわき思の、いまさらに
ひくにあらねど、いとあはれ、
より〱かゝる朝鮮の空。

その六

はつきの風のすみわたり、

千草の袖のうらきよく、
秋は晴るれど、此處はなは
ながめ勝ちなる軒のつま、
何をなげきの雲ぎりの
思もつみはせざれども。

その七

形見の床ははなさねど、
夢には美佐緒、いくたびか
こゆるもあはれ支那山を、
わたるもあはれ海原を、

何ををしさの、いたづらに
立ち迷ふにはあらねども。

その八

尾花の袖の風ふけて、
萩の上葉の露おもり、
なくや鴈がね聲たえず、
つま戀ふ鹿もきく頃は、
おこの猛雄も物は思ふ。
ましてや美佐緒、また雪子。

その九

秋もいよ〳〵更けゆきて、
やまと嶋根も霜ぞふる。
おとにきこゆる滿州路、
西刺比利嵐いまぞ吹く、
すめらみくさや寒からむ。
夫にも送れとおもひ立つ
こゝろも厚き綿の衣。

その十

學の庭のかへり路に、
きくや平壌の勝いくさ。

雪子は空に駈け戻り、
「母さま聞きてか戰をば、
また日の本の勝いくさ。
父のほまれのきこえずや」

その十一

問ふもゆかしき言の葉を
きけども母はなか〳〵よ
すぐれぬ氣色なよならむ。
「雪や悦べ、こたびこそ
父のほまれの來まさめ」と、

いふさへ末は微なり。

その十二

むかふ面も打ち晴れず、
きく言葉さへ力なく、
つねには似ざる母の影。
雪子も何時かかき曇り、
「母さまわづらひまし給ふ、
こゝろもとな」と取り縋る。

その十三

ゐをるゝ雪子いだきあげ、

みどりの髪をかいなでゝ、
「母は恙のあらぬなり。
さはさりながら我が子よや、
父が門出の敎をば
汝は今なほ忘れずや」

その十四

「そを忘るべき母さまよ。
いくさ立ちせば武士の
生きて歸は思はじな。
汝も待つなどのたまひき。

あゝ父上の女にあれば、
待たじ泣かじと應答けり。

その十五

「いまもおぼえぬ其の敎、
なに忘れめや母さま」と、
見あぐる顏をまもる母、
「さては告ぐべき事のあり。
父は功勳ともろともに
手傷も重しときこゆなる」

その十六

「泣かじ母さま、あは泣かじ。
泣かじとばかりふし沈み、
むせぶや下よ、さすが雪、
しばし言葉もなかりしが、
「のう母さまよ、いかならむ、
醫師ありてか、支那山も」。

その十七

「ものな思ひそ、こや雪子。
すめらみくさの進むには、
天皇の賜へる醫士あり。



事はかゝじな、何時何處。
おはみ恵のふかければ、
まなく癒えなむ、父の傷。

その十八

「兼ねても造る綿の衣
こよひは成りも終はらなむ。
汝よ教へむ繃帯を。
八十武士や父上の
手傷まくべき繃帯を
製りて彼處に疾くやらむ」。



その十九

心づくしの綿の衣
裁ち縫ふ母の膝ちかく、
さくや千條のまきの布。
まくや幾重のまきの布。
むかふ火かげも影細き
窓に折しも父のふみ。

## 第三編　遺書の巻

その一

「廣島沖の朝なみよ、
八十武士と舟出して、
朝鮮浦遠く入りてより、
かなゝへ見れば月三月、
日數は何時か八十あまり
百日に近くなりにけり。

その二

「海よは舟の通へども、
空には雁もたよれども、
思ふこゝろのいとまなく、

よそにすぎぬる故郷に、
變あらずや汝美佐緒。
つゞか無くてか雪も又。

その三

「草むすかばね水づく屍、
身を大君のみためにと
思ひ定めて來にし身は、
あらがね熔かす暑さとて、
踏みもわづらふ岩根とて、
ろを殊更に何かいはむ。

その四

「七月の末にむかひたる
成歡壘のいくさにも、
朝鮮の都のからめ手を
余は守りてありければ、
皇軍の勝も外にきゝ、
報ぐべき事も無かりしを。

その五

「さはさりながら今ぞ來ぬ、
やまと男兒の妻子なる

汝等につげむ時は來ぬ。
そは大やまと八十嶋に、
はやも聞こえていはふらむ、
平壌城の勝いくさ。

その六

「われは先鋒を賜はりて、
いさみ立ちたる中和道。
駒を頻に進むれば、
をりしも秋の末つ方、
このもかのもも紅葉きて、
迎ふもあはれ、皇軍を。

その七

「兼ねても定む包み討ち、
四手に分かれて進みたる
天皇御軍は、これもかも
共にちかづく平壌府。
矢倉も敵も一もみに
微塵にせんと寄せにけり。

その八

「敵の搆を見わたせば、

山には高く幾とりで、
野邊には廣く幾堡壘、
雲か霞とたなびきて、
さながら築く萬里城、
揉むにかひある心地する。

その九

「いで一揉と打ちよせて
どつと擧げたる鬨の聲。
敵も覺期の城ごもり、
待ちつと聲をあはすれば、

山河もさつと打ちふるひ、
天地も動くばかりなり。

その十

「破らずやはといさむ我。
摧けはせじと守る敵。
互に必死とたゝかへば、
彈丸は霰と降りしきり、
劍は霜とかゞやきて、
風ものすごき修羅の巷。

その十一

「なかまもすごき船橋里、
敵は一堡も取られじと
壁に縋りてたゝかへば、
我もあまさじ一騎もと
力のかぎり討ちいづる、
彈丸も殘らず成りにけり。

その十二

「駒の腹帶引きしめて、
今こそぬけや日本刀、
余ま續けとさし招き、

一鞭あてゝ踊り入れば、
いづれも同じ日本男の
おくれず越ゆる敵の壘。

その十三

「さすが嶮しき堡壘さへ、
今は怺へず打ち破れ、
くづれ立ちたる敵の群。
大同江の岸たかく
散るは木の葉か白波か、
げまおもしろの勝戰。

その十四

「諸手の軍打ちかちて、
平壌城の朝かぜよ、
なびくも嬉し日の御旗。
はるかに君を仰がむと、
下り立つ袖に湧く血汐、
はじめておぼゆ我が重傷。

その十五

「いはへや美佐緒夫の爲。
うたへや雪も父のため。

天皇に仕ふる大丈夫の
けふこそ花は咲きにけれ。
散るとて何か惜しむべき。
あかき心を天皇知れば。

その十六

「ふたゝび立たぬ我が痛手
やがて形見は屆かなむ。
はきたる太刀は折れたれど、
武雄のもとに送りてよ。
「父が此の世に遺すべき

教は是と言づて〻。

その十七

「いはでもあるき事ながら、
み國のためと散る花を
惜しむはやがて天皇の仇。
天皇の御仇は我がかたき。
妻とは思はじ、歎きなば。
我が子と爲さじ、泣きもせば」。

その十八

母がきかする父の書簡、
墨さへ清き父の書簡、
雪子は胸にかきいだき、
「泣かじ父上、余は泣かじ。
子とおぼしてよ、何時までも。
母さま泣きてたまはるな」

その十九

「あが子いしくもいひにたり。
かなたの父のきかれなば、
さこそよろこびたまふらめ。
みかどのみためや國のため、

ちる武士の花のいろ、
泣きて妻女の何かせむ」。

その二十

かたじけなくも大君の
あつき言葉を添へられて、
やがて形見は着きにけり。
折れたる太刀に血の肌衣、
天皇に盡くしゝ赤心の
あかき色香ぞ忍ばるゝ。

その二十一

天皇の惠の露霜に
薫のこしてちる男兒、
庭の教を、おきふしに
守りたがへぬ其の妻女。
これや誠に秋津しま
やまと撫子おもしろや。

三輪田眞佐子著

# 女子の本分

全壹册

定價金貳拾五錢也地方は郵送税金四錢也（切手代用は一割増の事）
但國光又は女鑑購讀者各位には定價金の二割引（即金貳拾錢也）を
以て發賣可仕候

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所　國光社

# 女鑑第七十七號目次



## 社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收書差出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領取證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

## 女鑑

每月貳回五日廿日發行

定價壹册金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號字廿三字詰一行金二十錢


明治廿八年一月九日印刷
同　年同月十日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衞
同
編輯人　山根勇藏
同
發行所　國光社

（印刷所　東京國光社印刷部）

【明治二十四年八月八日内務省許可
明治廿五年三月十二日遞信省認可】